岐阜県文化財保護センター調査報告書　第18集

阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡

１９９３

岐阜県土木部

財団法人　岐阜県文化財保護センター

序

霊峰御嶽山の麓に広がる小坂町は、豊かな自然とともに、文化財の多い所でもあります。特に縄文時代から弥生時代にかけては、飛騨地方のみならず、全国から注目される遺跡が多くあります。

さて、このたび、県単道路改良工事（湯屋温泉線）に伴い、埋蔵文化財の記録保存をはかるため、阿弥陀堂遺跡および深作裏垣内遺跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は、岐阜県土木部萩原土木事務所より岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

阿弥陀堂遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器編年を研究する上で、重要な資料を提供していることで知られる著名な遺跡です。また、深作裏垣内遺跡は、縄文時代の各時期にわたる資料が知られていました。今回の調査においても、同時期の貴重な遺物が出土しました。今回の成果は、今後の研究に新たな資料を提供しただけでなく、埋蔵文化財保護の意義を理解していただくためにも役立つものであると思います。

最後になりましたが、この報告書の刊行にあたり、発掘調査及び出土品の整理・報告書の作成にご指導・ご協力を賜りました関係諸機関ならびに関係者各位、そして発掘調査、整理作業に携わって下さった多くの方々に深く感謝を申し上げます。

平成６年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター

理事長　　吉田　豊

例　言

1．本書は、阿弥陀堂遺跡（G17O00894 ）および深作裏垣内遺跡（G17O00895 ）の発掘調査報告書である。「阿弥陀堂遺跡」は、岐阜県教育委員会『岐阜県遺跡地図』（1990）では、「深作阿弥陀堂遺跡」となっているが、従来から使われている「阿弥陀堂遺跡」の名称を使用した。

2．阿弥陀堂遺跡は益田郡小坂町赤沼田深作字阿弥陀堂に所在し、深作裏垣内遺跡は益田郡小坂町赤沼田深作字裏垣内に所在する。

3．本調査は、県単道路改良工事（湯屋温泉線）に伴うもので、岐阜県土木部萩原土木事務所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

4．本調査にあたっては、指導調査員として渡辺誠名古屋大学教授の指導を得た。

5．発掘調査は平成5年度に実施し、上嶋善治が担当した。

6．本書に記載した遺物の実測については、土器は、谷口和人と上嶋善治が、石器は上嶋善治が中心となって作業を進め、整理作業員が補助した。

7．実測図等のトレースは次の者が行った。

政井美子　坊田洋子　田中春美　田邊直子　屋上満智子　辻千恵子　中屋寿賀子
松葉弘子　辻垣内ひとみ　古川恵利子　新田香代子

8．遺物写真の撮影は野村宗作が行った。

9．本書の執筆は、第1章第1節は揖斐郡藤橋村立藤橋中学校教諭の古田靖志氏に玉稿を頂き、第3章第2節・第5章第1節は藤田英博が執筆し、一部上嶋善治が加筆した。その他は、上嶋善治が担当した。編集は上嶋善治が行った。

10. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）

大江　㊟　古田靖志　増子康真　宇野隆夫　岩田　修　石原哲彌　吉朝則富　藤本健三
加藤和美　岐阜県土木部萩原土木事務所　小坂町　益田県事務所　飛騨教育事務所

11. 参考資料として、大江　㊟『飛騨の考古学Ⅰ』（1964）より、挿図を一部転載させていただいた。

12. 発掘調査作業ならびに調査記録および出土品の整理等には次の方々の参加・協力を得た。

鈴木　護　大森茂男　小林一茂　木一林平　二村勇　上野利造　吉仲八百彦　松森酒造
坊田洋子　田邊直子　屋上満智子　辻千恵子　中屋寿賀子　松葉弘子　辻垣内ひとみ
田中春美　古川恵利子　新田香代子

13. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　次

序
例　言
第１章　遺跡の立地と歴史的環境……1
　第１節　地形および地質……1
　第２節　歴史的環境……4
　第３節　阿弥陀堂・深作裏垣内遺跡研究史……7
第２章　発掘調査の経過……9
　第１節　発掘調査に至る経緯……9
　第２節　調査の方法……9
　第３節　発掘調査の経過……10
第３章　阿弥陀堂遺跡の調査……11
　第１節　基本的層序および遺物の出土状況……11
　第２節　土器……13
　第３節　石器……29
　第４節　陶磁器……29
第４章　深作裏垣内遺跡の調査……33
　第１節　基本的層序および遺物の出土状況……33
　第２節　土器……33
　第３節　石器……35
　第４節　陶磁器……37
第５章　考察……38
　第１節　阿弥陀堂遺跡出土の土器について……38
　第２節　発掘調査のまとめ……47
　引用・参考文献……48

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　遺跡周辺の地形および地質……2
第３図　地区設定図……3
第４図　小坂川流域の遺跡……5
第５図　阿弥陀堂遺跡周辺地形復元図……11
第６図　阿弥陀堂遺跡の土層図……12
第７図　阿弥陀堂遺跡出土の土器（１）……14
第８図　阿弥陀堂遺跡出土の土器（２）……16
第９図　阿弥陀堂遺跡出土の土器（３）……19
第10図　阿弥陀堂遺跡出土の土器（４）……21
第11図　阿弥陀堂遺跡出土の土器（５）……23
第12図　阿弥陀堂遺跡出土の土器（６）……24
第13図　阿弥陀堂遺跡出土の土器（７）……27
第14図　阿弥陀堂遺跡出土の石器（１）……30
第15図　阿弥陀堂遺跡出土の石器（２）……31
第16図　阿弥陀堂遺跡出土の石器（３）……32
第17図　阿弥陀堂遺跡出土の陶磁器……32
第18図　深作裏垣内遺跡の土層図……34
第19図　深作裏垣内遺跡出土の土器……35
第20図　深作裏垣内遺跡出土の石器（１）……35
第21図　深作裏垣内遺跡出土の石器（２）……36
第22図　深作裏垣内遺跡出土の陶磁器……37
第23図　参考土器（１）……39
第24図　参考土器（２）……40
第25図　参考土器（３）……41

付表目次

第１表　小坂川流域の遺跡……6
第２表　Ⅰ類土器　調整観察表……14
第３表　第Ⅳ層と第Ⅴ層の土器出土状況……28
第４表　土器分類の比較……41
第５表　ⅡＡ類の分類……42
第６表　阿弥陀堂遺跡出土石器一覧表……49
第７表　深作裏垣内遺跡出土石器一覧表……50

図版目次

図版１　１．阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡遠景　２．阿弥陀堂遺跡発掘前の状況
図版２　１．Ｃ42区北壁　２．阿弥陀堂遺跡発掘後の状況　３．作業風景
図版３　１・２．遺物出土状況　３．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅰ類）
図版４　１・２．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅰ類）
図版５　１．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅰ類）　２．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡＡａ・Ａｂ類）
図版６　１．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡＡｃ類）
　　２．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡＡｄ・Ａｅ・Ａｆ類）
図版７　１．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡＡｇ類）
　　２．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡＢ・Ⅲ類）
図版８　１．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅳ類）　２．阿弥陀堂遺跡出土土器（ＶＡ類）
図版９　１・２．阿弥陀堂遺跡出土土器（ＶＡ類）
　　３．阿弥陀堂遺跡出土土器（ＶＢ類）
図版10　１・２・３・４．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅵ類）
図版11　１・２．阿弥陀堂遺跡出土石器
図版12　１．阿弥陀堂遺跡出土石器　２．阿弥陀堂遺跡出土陶磁器
図版13　１．深作裏垣内遺跡発掘前の状況　２．深作裏垣内遺跡発掘後の状況
図版14　１・２．Ｂ１～Ｂ４区南壁　３．Ｃ23・24区北壁
図版15　１．深作裏垣内遺跡出土土器　２．深作裏垣内遺跡出土石器
図版16　１．深作裏垣内遺跡出土石器　２．深作裏垣内遺跡出土陶磁器

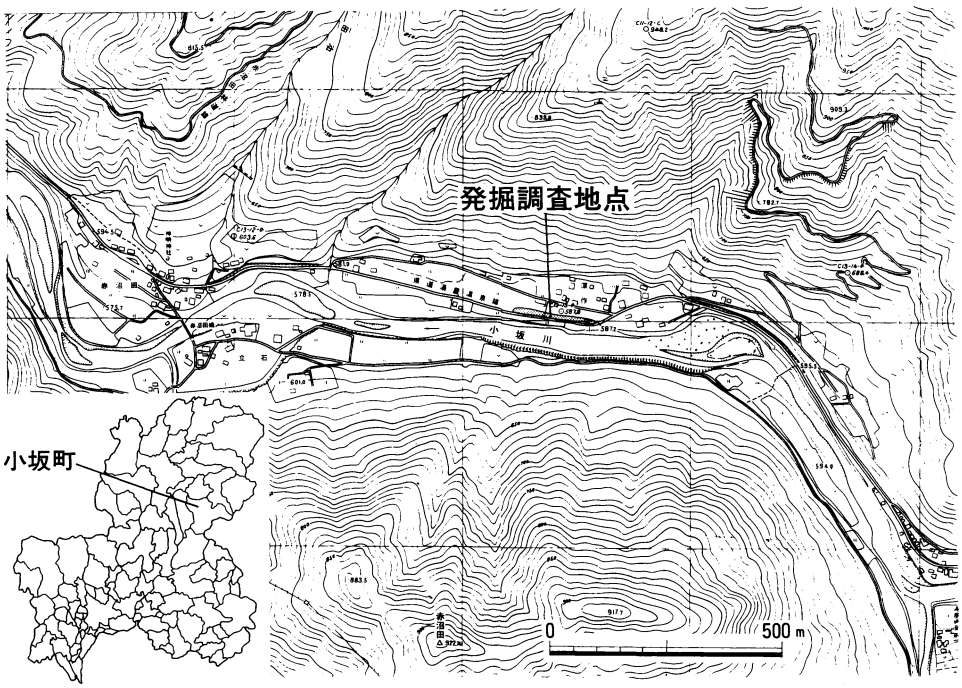
第１章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　地形および地質

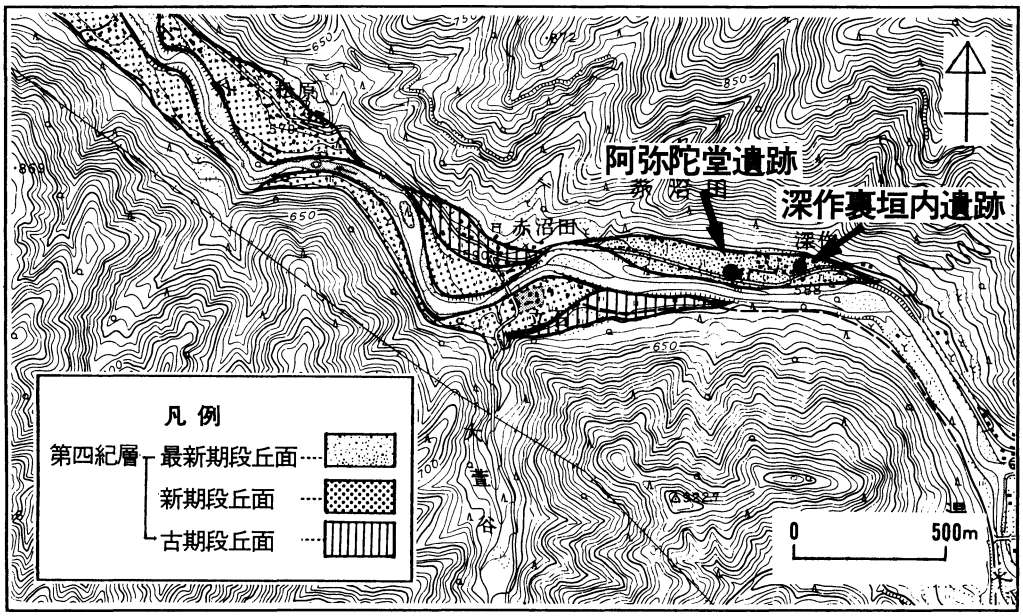
遺跡の存在する益田郡小坂町赤沼田付近の地形は、1100m前後の定高性の山々と、小坂川によって開析された深い谷からなる。小坂川は落合付近より飛騨川との合流点までは北西方向に流下し、ほぼ流域全体に小規模の河岸段丘を形成している。この辺りの山麓斜面が非常に急峻なため、流域の河岸段丘面が人々の生活の場となっている。

この阿弥陀堂・深作裏垣内遺跡も第四紀更新世以降に小坂川によって形成された最新期段丘面上に立地している。赤沼田付近には三段の河岸段丘が形成されており、遺跡付近に最新期段丘面が、さらに小坂川下流 500m付近に新期段丘面、古期段丘面が存在している。遺跡の立地面は、小坂川の現河床堆積物が形成する平坦面との間に４ｍ～５ｍの標高差を有し、しかも明瞭な段丘地形を形成していることから、明らかに現河床堆積物の平坦面とは区別できる。

遺跡周辺の地質は、中生代白亜紀後期の濃飛流紋岩類と、その基盤上に小坂川の働きで堆積した第四紀の段丘堆積物からなる。小坂川流域の段丘堆積物を除けば、すべての地域が濃飛流



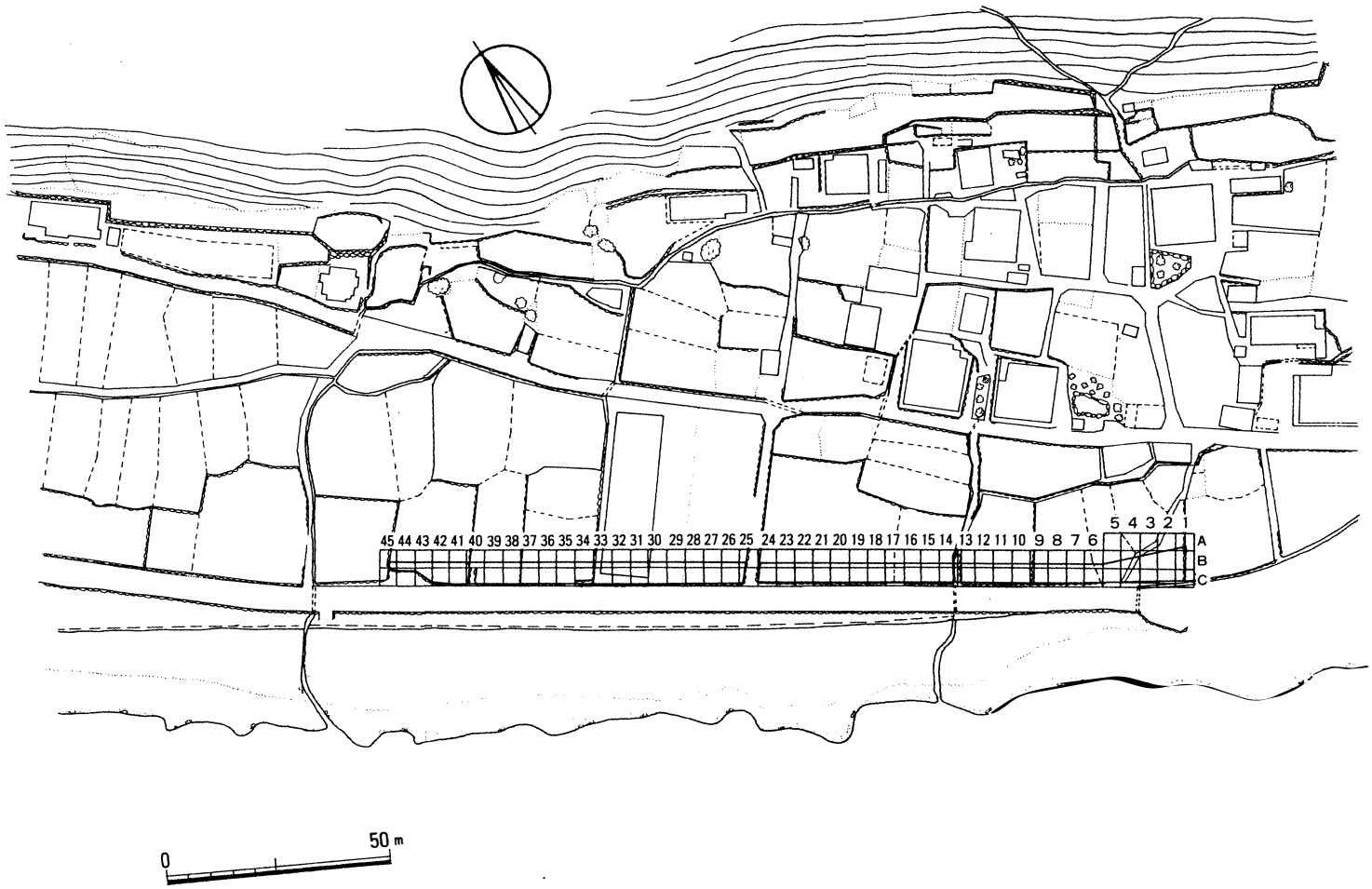
第１図　遺跡の位置



第２図　遺跡周辺の地形および地質

紋岩からなる極めて単調な地質を呈している。濃飛流紋岩類は、中生代白亜紀後期の大規模な火山活動による堆積物であり、この地域の岩質は暗灰色－緑灰色を呈する流紋岩溶結凝灰岩である。

遺跡の立地している最新期段丘堆積物は、砂礫層や砂層などからなる。砂礫層に含まれる礫はいずれも円礫で、径２～30cmで５～10cmのものが多く、流紋岩や花崗斑岩などからなる。基質は黄褐色の細粒砂が50～80cmの厚さに堆積している。これらのことから、隆起が起こり最新期の段丘面が形成される以前は、小坂川の流れが現在と比べてゆるやかであったことが推定できる。


45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
A
B
C
0
50 m

第3図　地区設定図

第2節　歴史的環境

阿弥陀堂・深作裏垣内遺跡は小坂川右岸の段丘上に立地するが、益田郡小坂町赤沼田字深作の地は、小坂町内で最も日当たりのよい所とされる。小坂川の流域の遺跡については、第4図・第1表でその位置を示したが、縄文時代の遺跡が多く分布している。遺跡の多さは、自然の状況もさることながら、多くの先学の丹念な調査ならびに埋蔵文化財保存の努力の賜物でもある。ここでは、縄文から弥生にかけての遺跡の状況を出土土器を中心に簡単にまとめたい[1)]。

縄文早期の押型文を出土した遺跡として、福応寺遺跡がある。楕円文・山形文の押型文と無文土器片が見つかっている。長瀬上野遺跡では、山形文・楕円文のものとともに、凸帯を伴うものがある。縦に施文した山形文の間に凸帯が3本横走し、刻目が施されている。なお、この遺跡は、中期・後期・晩期の土器片も少量出土している。また、土偶の顔面が出土していることでも知られている。水口遺跡では、いわゆる沢式と呼ばれる黒鉛入りの山形文を帯状施文した土器片が1点出土しており、山形文・楕円文とともに、撚糸文土器が1点出土している。この遺跡では、火熱を受けた円礫を有する集石遺構も検出されている（小坂町教委1978）。他に押型文を出土している遺跡としては、深作裏垣内・南垣内遺跡がある。

早期後半の土器として、粕畑式が味屋大林・南垣内遺跡で、上ノ山式が南垣内遺跡、入海式・石山式が深作裏垣内・南垣内遺跡で、天神山式が南垣内遺跡で出土している。

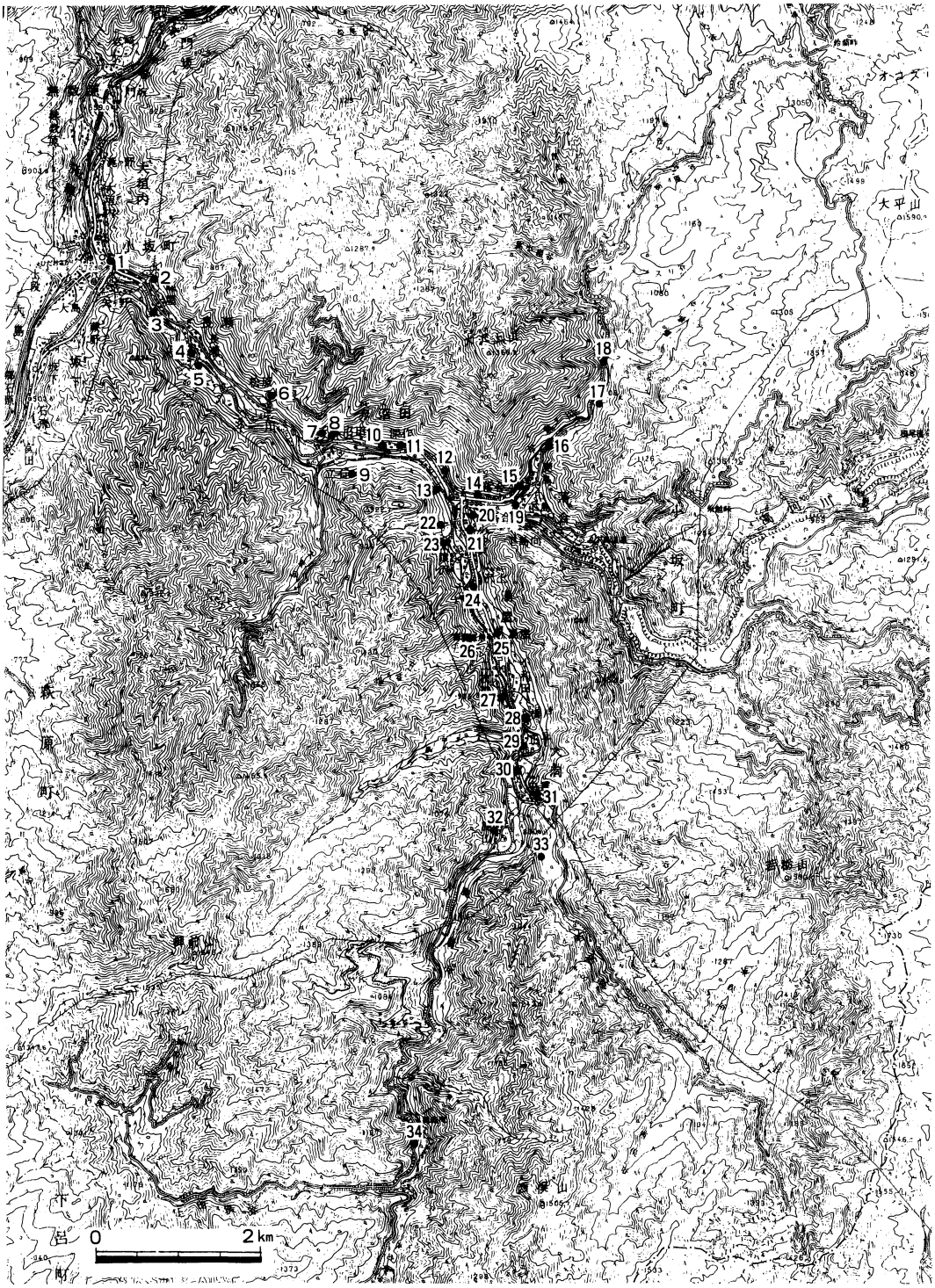
前期の資料が比較的まとまっているのは、味屋大林遺跡である。他に水口・深作裏垣内・南垣内の各遺跡でも前期の土器が出土している。

深作裏垣内遺跡では、後述するように中期初頭の深鉢形土器が復元されている。南垣内遺跡では、新保・新崎様式の土器が2個復元されており、中期の資料も豊富に出土している（小坂町教委1984）。湯屋遺跡では、中期前半の土器もあるが、中期後半の土器が主体である。この遺跡では、さらに後期・晩期の土器も少量ながら出土している。中期後半の遺跡として水口遺跡がある。ここからは、埋甕を伴う竪穴住居跡も見つかっており、後期・晩期の土器も出土している。

後期の資料が豊富に出土したのは、南垣内遺跡である。関東系の堀之内式・加曽利B式をはじめ、縁帯文土器や少量の北陸系の土器が見られる。前述の遺跡以外では、平氏ケ原遺跡で少量の後期土器を出土している。

晩期の資料としては、深作川向上段遺跡で、晩期前半の土器が少量出土しているが、後述するように阿弥陀堂遺跡では、晩期末から弥生にかけてのまとまった資料が提供されている。

弥生時代の遺跡としては、長瀬上野遺跡と阿弥陀堂遺跡があげられているが、ともに水神平式の土器片の出土で知られている（成瀬1965）。



第４図　小坂川流域の遺跡

第1表　小坂川流域の遺跡（岐阜県教育委員会『岐阜県遺跡地図』1990をもとに作成）

番号	遺　跡　名	所　在　地	地目	時　代	遺 跡 の 概 況
1	水口遺跡	益田郡小坂町坂下水口	道路	縄　文	昭和48年発掘調査
2	味屋カンド林遺跡	益田郡小坂町長瀬カンド林	畑地	縄　文	
3	味屋大林遺跡	益田郡小坂町長瀬味屋	畑地	縄　文	滅失
4	長瀬上野遺跡	益田郡小坂町長瀬上野	畑地	縄文・弥生	滅失
5	古子遺跡	益田郡小坂町長瀬古子	水田	縄　文	
6	山口遺跡	益田郡小坂町長瀬山口	山林	縄　文	
7	赤沼田遺跡	益田郡小坂町赤沼田西	畑地	縄　文	
8	小野遺跡	益田郡小坂町赤沼田小野	畑地	縄　文	
9	立石遺跡	益田郡小坂町赤沼田立石	畑地	縄　文	
10	阿弥陀堂遺跡	益田郡小坂町赤沼田深作	水田	縄文・弥生	
11	深作裏垣内遺跡	益田郡小坂町赤沼田深作	田畑	縄　文	
12	深作オオゾレ遺跡	益田郡小坂町赤沼田深作	畑地	縄　文	
13	深作川向上段遺跡	益田郡小坂町赤沼田深作川向	水田	縄　文	
14	福応寺遺跡	益田郡小坂町落合石畑	畑地	縄　文	
15	中島遺跡	益田郡小坂町落合中島	畑地	縄　文	
16	岩崎遺跡	益田郡小坂町落合岩崎	原野	縄　文	
17	平氏ケ原遺跡	益田郡小坂町落合平氏ケ原	山林	縄　文	
18	あし谷遺跡	益田郡小坂町落合あし谷	宅地	縄　文	滅失
19	南垣内遺跡	益田郡小坂町落合南垣内	田畑	縄　文	平成1年発掘調査
20	中ノ段遺跡	益田郡小坂町落合中ノ段	田畑	縄　文	
21	小井戸遺跡	益田郡小坂町湯屋小井戸	畑地	縄　文	
22	長尾遺跡	益田郡小坂町湯屋長尾	水田	縄　文	
23	小瀬遺跡	益田郡小坂町湯屋小瀬	水田	縄　文	
24	沢上遺跡	益田郡小坂町湯屋沢上	田畑	縄　文	
25	湯屋遺跡	益田郡小坂町湯屋	宅地	縄　文	平成1年発掘調査
26	塩屋遺跡	益田郡小坂町湯屋塩屋	田畑	縄　文	
27	二枚越遺跡	益田郡小坂町大洞二枚越	畑地	縄　文	
28	橋戸遺跡	益田郡小坂町大洞橋戸	田畑	縄　文	
29	正子遺跡	益田郡小坂町大洞正子	畑地	縄　文	
30	蕨野中段遺跡	益田郡小坂町大洞蕨野中段	田畑	縄　文	
31	中重遺跡	益田郡小坂町大洞中重	田畑	縄　文	昭和56年発掘調査、滅失
32	鹿山遺跡	益田郡小坂町大洞鹿山	田畑	縄　文	昭和56年発掘調査、一部滅失
33	若栃遺跡	益田郡小坂町大洞若栃	山林	縄　文	
34	砂小屋遺跡	益田郡小坂町大洞砂小屋	山林	縄　文	

第３節　阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡研究史

阿弥陀堂遺跡

阿弥陀堂遺跡は、飛騨地方の縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器編年を研究する上で貴重な資料を提供している。今回の発掘調査の成果は後述するが、これまでの調査の成果および研究史を簡単に整理してみたい。

阿弥陀堂遺跡は、昭和26年(1951)の開田工事中に発見され、大江錦舟によって記録された。その後、昭和33年(1958)３月17日に大江㊟、江坂輝弥によって発掘調査がなされた。これらの調査結果は昭和40年(1965)に大江㊟によってまとめられた（大江㊟1965)。

出土した土器は、第１類（精製土器)、第２類（半精製土器)、第３類（粗製土器）の３種からなり、「阿弥陀堂式」を提唱している。

その後、阿弥陀堂遺跡出土の土器の編年的位置付けが議論される。

浮線文土器を研究した永峰光一は、阿弥陀堂遺跡出土の有文土器類を大洞Ａ式の古い部分の影響とみなし、樫王式に比定される条痕文土器が伴う点から、東海地方の編年観との矛盾を指摘した（永峰1969)。

大参義一は、阿弥陀堂遺跡出土の土器を５類に分類し分析している（大参1972ａ)。また、岐阜県内の縄文遺跡の状況をまとめた『岐阜県史』通史編原始において、大参義一は、「半精製土器に地域色がみられるが平行型式は東海地方に普遍的で、愛知県一宮市の馬見塚遺跡、下り松遺跡、愛知県丹羽郡西浦遺跡に代表的な類例をみる。」と阿弥陀堂遺跡出土の土器の位置付けを行っている（大参1972ｂ)。

弥生時代の成立に関して研究を進めている紅村弘は、阿弥陀堂遺跡の流水構成文をみる土器を、橿原型有文精製土器より推移したものと考え、大洞Ａ式の新しい部分と併行するとみなした（紅村1979)。

それに対して、増子康真は、紅村説は、時期的にずれるとみなし、「阿弥陀堂の主要な精製土器は、下野式に始まる晩期後半の土着的型式と、大洞Ａ式本来の要素の影響下に成立したのであろう。浮線網状文を有しないのが阿弥陀堂精製土器の特質をなしている」としている（増子1981)。

遺跡の立地に関して、大江上は、阿弥陀堂遺跡とともに、深作裏垣内遺跡と合わせ、さらに中近世にいたるまでの集落構成の状況を考察している（大江上1964)。

阿弥陀堂遺跡出土の土器は注目を集めて来たが、本遺跡は昭和33年以降発掘調査が行われていなくて、今まで新たな資料の追加はなかった。今回の発掘調査によって従来の発掘地点とはやや異なるものの、新たな資料が加わることになった[2)]。

深作裏垣内遺跡

深作裏垣内遺跡は、縄文早期より晩期までの土器片や石器類が表面採集されていたが、昭和33年（1958）に遺跡確認のため、東西方向に幅１ｍ、長さ４ｍのトレンチを入れた調査が行われた。この際、トレンチの西部おいて、表土下より約60㎝の所から縄文中期初頭の土器片がまとまって出土し、復元されている。また、この土器の下部に、石組遺構が検出されている。この調査結果は、『日本考古学年報』11に紹介され（大江㊟1962)、さらに、『飛騨の考古学Ｉ』にて、出土遺物を中心に報告されている（大江㊟1964）[3)]。

後者の報告によると、土器としては、山形文と楕円文の押型文土器、「石山式または木島式と思われる土器」、前期後半の土器があり、前述の復元された土器とともに中期初頭の土器で、「五領ケ台式に比定あるいは平行する土器片」が認められる。さらに晩期の土器もある。また、『岐阜県史』の「遺跡一覧表」によると、後期の土器も出土している。石器類としては、石鏃（150本程度)、石匙、打製石斧、磨製石斧、石錐、石皿、スクレイパーなどが出土している。

〔注〕

1）主として、(大江㊟1964）・（大参1972ｂ）を参考にした。

2）後述するように、昭和26年および昭和33年の調査地点と、今回の調査によって土器が集中的に出土した地点は、やや異なっている。従って、仮にそれぞれをＡ地点・Ｂ地点・Ｃ地点としておく。

3）『日本考古学年報』では「上垣内遺跡」となっている。

第２章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

今回の発掘調査で、阿弥陀堂遺跡および深作裏垣内遺跡の２遺跡が対象となった原因は、岐阜県土木部萩原土木事務所による県単道路改良工事（湯屋温泉線）による。この２遺跡は、県道に沿って山側の地点に以前からその所在が知られていた。

今回の県道の改良工事に伴い、岐阜県土木部萩原土木事務所より、平成３年11月から12月にかけて、事業計画区域内における埋蔵文化財の有無および所在する場合の取扱いについて、小坂町教育委員会を通じて岐阜県教育委員会文化課と協議された。そして平成３年12月には、岐阜県教育委員会文化課による試掘調査が行われ、記録保存するための調査面積を約 500㎡とし、その範囲の確定がなされた。その結果をもとに、岐阜県土木部萩原土木事務所から岐阜県教育委員会文化課を通じて委託を受けて、財団法人岐阜県文化財保護センターが平成５年度に発掘調査を実施した。

第２節　発掘調査の方法

発掘調査の対象となった地点は、県道の拡幅部のみであり、幅約３ｍで長さ約170ｍの範囲である。現道は、東西方向にほぼ直線的に延びていたので、地区の設定は、現道に平行する形で第３図のように４×４ｍのグリッドで地区を設定した。グリッド記号は、北からＡ・Ｂ・Ｃとし、東から西へ、１・２・３…とした。

発掘は、道路改良工事の都合により、東端から順次西方へ進んだ。１列目から５列目のあたりは畑地で、遺物が表採される地点であったので、表土より手掘りで作業を進めた。それに対して６列目から33列目のあたりは、重機による表土剥ぎを実施した。34列目以西は表土からも遺物が出土し、その量も多いので、一部攪乱されていたが、手掘りで作業を進めた。

また、遺物の出土状況および地形の状況から、後述するように、この34列目以西を「阿弥陀堂遺跡」とし、33列目以東を名称としては不適切な面もあるが、「深作裏垣内遺跡」と便宜的に想定して調査を実施した。

第３節　発掘調査の経過

８月下旬までに現場事務所の設置等の準備や、地形・地質の調査を実施し、９月10日に調査始め式を行った。10月半ばで掘削は終了したが、10月下旬以降に実測等の調査を実施し、現場事務所の撤収等は、11月上旬までかかった。以下、週ごとに調査経過の概要を記す。

第１週（9.8～9.10）用具の搬入を行い、調査始め式を行った。除草と東方より杭打ちを実施した。

第２週（9.13～9.17）１列目から13列目までの表土剥ぎを行い、６列目までの掘削を進めた。Ｂ３区の第Ⅰ層（耕作土）より石鏃１点出土するものの、良好な遺物包含層は確認されなかった。

第３週（9.20～9.24）13列目までの掘削およびセクションの実測を終了し、14列目から24列目までの表土剥ぎを行った。

第４週（9.27～10.2）14列目から24列目までの掘削を終了した。遺物の出土が少なく、作業は能率よく進んだ。Ｃ34～35区およびＣ41～42区を一部掘削する。耕作土より下の埋土の層を確認する。

第５週（10.4～10.8）14列目から24列目までのセクションの実測を終了し、25列目から33列目までの表土剥ぎを行った。34列目から44列目の掘削を進めて、Ｃ37区のあたりで良好な遺物包含層を確認した。

第６週(10.12～10.15)33列目までの掘削を進めたが、遺物の出土は、わずかであった。Ｃ37区を中心とした地点では土器が集中的に出土した。45列目までの掘削と写真撮影を終了し、合わせて、阿弥陀堂遺跡周辺地形のレベル調査も行った。

第７週(10.18～10.20)土層セクションの実測を進めた。

以後、現場事務所を撤収した後、岐阜県文化財保護センター飛騨出張所にて、整理作業および報告書作成作業を行った。

第３章　　阿弥陀堂遺跡の調査

第１節　基本的層序および遺物の出土状況

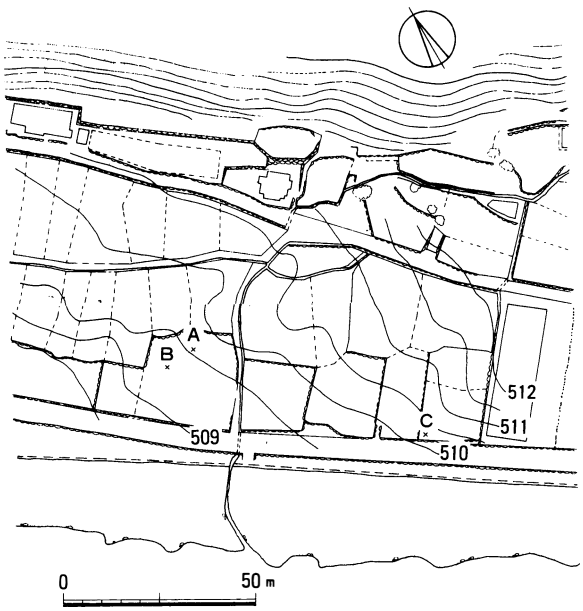
今回の発掘調査は、県道の拡幅部のみの調査である。『岐阜県遺跡地図』には、埋蔵文化財包蔵地を赤い丸印で記されているだけで、遺跡の範囲は明示されていない。今回の調査地点は、「阿弥陀堂遺跡」と「深作裏垣内遺跡」の印がつけてある所の中間に位置する。本調査に、先立つ試掘調査により、遺物包蔵の可能性が高い範囲が確認され、今回の調査に至った。従って、出土した遺物が「阿弥陀堂遺跡」と「深作裏垣内遺跡」のどちらに属するものか、調査区のどこを境に両遺跡を分けるのかを判断する必要がある。

出土遺物は、34列目以西に濃密に分布する。現況では、そこに段差があり、周辺のレベル測定による地形復元作業によっても、微地形がこのあたりで変化するように推定された。従って、阿弥陀堂遺跡は、この地点より西側と判断した。また、本来の遺跡はここから北西方向に広がっていたと推定する。昭和26年（1951）の調査では多くの遺物が発掘されたが、この地点をＡ地点とする。昭和33年（1958）の調査では、土器片と石鏃がわずかに出土したのみであるが、その地点をＢ地点とする。今回の調査で遺物が集中的に出土したのは、Ｃ37区を中心とした地点である。ここをＣ地点とする。ただし、この地点名はあくまで仮称である。

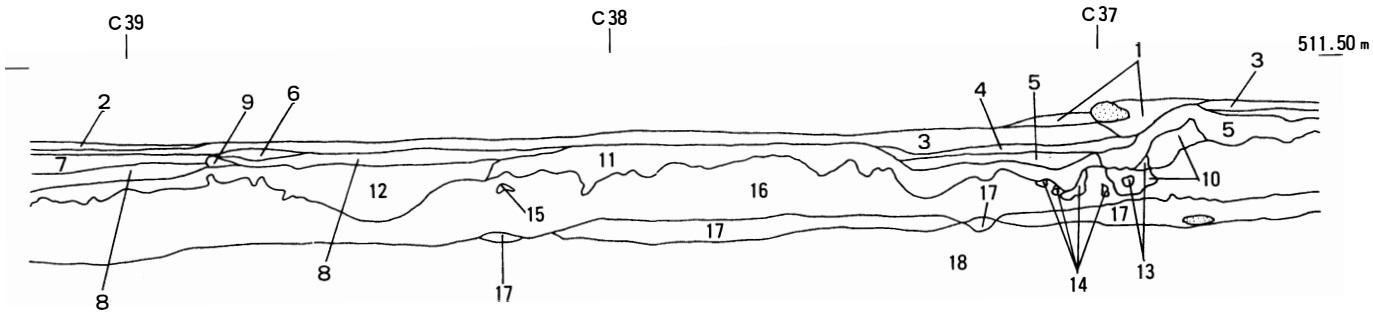
遺跡の所在地は、かつて水田および畑地であった。土層の堆積状況は、複雑な様相を呈するが、基本的には、次の５層からなると見ることができる。

まず、第Ⅰ層は、黒褐色粘質土で、耕作土の層である。一部土器片や石器類が表採できた。第Ⅱ層は赤褐色あるいは暗赤褐色の粘質土である。これらの層は、それぞれ約10～20㎝の厚さである。

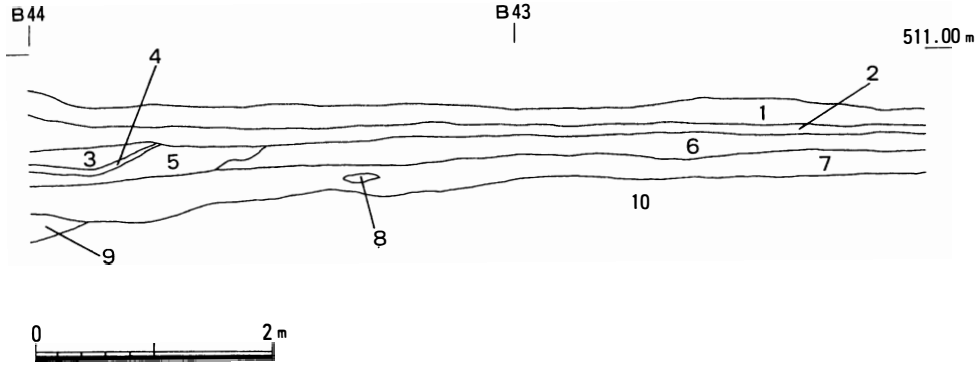
第Ⅲ層は複雑であるが、これは、埋土の層である。灰褐色や、黒褐色あるいは、黄褐色の砂質土の層が何層も重なっていた。遺跡周辺は、ゆるやかな傾斜地に石垣を作って耕作地を整備しているが、これらの層は、周辺の整地作業の際に形成されたもののようである。



第５図　阿弥陀堂遺跡周辺地形復元図



1．黒褐色粘質土
2．赤褐色粘質土
3．暗赤褐色粘質土
4．灰褐色砂質土
5．灰褐色砂質土（黄色砂土混じり）
6．灰褐色砂質土
7．褐色砂質土（黄褐色砂質土混じり）
8．赤褐色砂質土
9．黒褐色砂質土
10．灰褐色砂質土
11．黄褐色砂質土
12．灰褐色砂質土
13．黄褐色砂質土
14．褐色砂質土
15．灰褐色砂質土
16．明黄褐色砂質土
17．褐灰色砂質土
18．灰黄色砂土



1．黒褐色粘質土
2．赤褐色粘質土
3．暗褐色砂質土（黄色土混じり）
4．黄褐色砂質土
5．明褐色砂質土（黄色土混じり）
6．灰黄褐色砂質土
7．黒褐色砂質土
8．明黄褐色砂質土
9．黄褐色砂質土
10．灰黄色砂土

第6図　阿弥陀堂遺跡の土層図

第Ⅳ層は、明黄褐色砂質土であり、やはり埋土層と判断した。厚さは約20～50㎝である。

第Ⅴ層は、褐灰色のややしまった砂質土である。Ｃ37区を中心に、34列目から38列目のあたりまで広がっているが、削平された状況を見ることができる。土器や石器類の遺物を含んでいた。以下は、灰黄色の砂土となっている。

遺物は、第Ⅴ層で集中的に出土したが、第Ⅳ層まででも少しずつではあるが出土した。以下の記述で「第Ⅳ層出土」とあるのは、「第Ⅳ層までの出土」のことであることをことわっておく。また、挿図の出土土器の番号は、イタリック体が「第Ⅳ層までの出土」のもので、ゴチック体が第Ⅴ層出土のものである。

第２節　土器

包含層と認定した第Ⅴ層と、その上位の第Ⅳ層より、従来、阿弥陀堂式と呼ばれてきた土器と遠賀川系及び条痕文系土器が出土した。いずれも破片資料で、しかも、細片まで含めて合計点数約 700点で多くはない。これは包含層と認定した第Ⅴ層が削平を受けており、調査区全体に存在する層序ではなかったことに起因する。また、攪乱層である第Ⅳ層については後で詳しく検討するが、包含層の第Ⅴ層とほぼ同じ内容をもつ。ここでは、昭和26年に調査された阿弥陀堂遺跡（以下仮に阿弥陀堂Ａ地点とする）出土土器に類似する縄文時代終末期～弥生時代前期前半にかけての資料をⅠ期、これに続く弥生時代前期後半に相当する遠賀川系土器と条痕文系土器に比定できる資料をⅡ期とした。ここにⅠ期としたものは当然、縄文時代終末期と弥生時代前期前半部分の２つの時期に分けられるべきだが、出土資料（とくに粗製土器）が少なく、また、細片であるがゆえ分類が困難であったため、このように設定した。以下に詳述する。

Ⅰ期

文様をもたず、その多くがナデ調整と条痕調整によって器面を調整する無文の深鉢形土器、いわゆる甕形土器と工字文・浮線網状文と呼ばれる文様や、これから派生したとも考えられる沈線を主体とする文様をもつ土器に大別できる。これに若干の無文の精製土器が伴う。これをそれぞれⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類と大別した。

Ⅰ類（第７図・第８図、図版３・４・５）

無文の深鉢・甕形を呈する粗製土器でナデ調整や条痕調整によって調整される土器の一群。本来、器形による分類を行うべきだが、資料が断片的で器形が判明するものが少ないため、細分はできなかった。調整手法には（ａ）ナデ（１～５）・（ｂ）削り（５～９）・（ｃ）粗いミガキ（10～14）・（ｄ）条痕（15～39）が認められる。

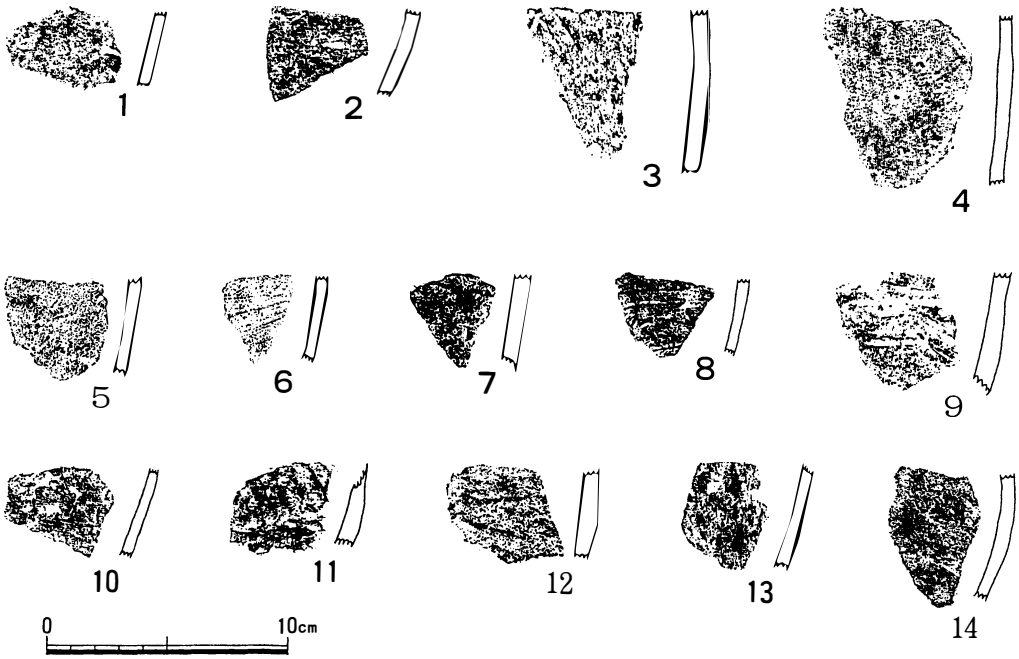
第2表　Ⅰ類土器　調整観察表

Ⅳ層出土　　Ⅰ類土器

調整手法									
外面					内面				
a	b	c	d	磨滅	a	b	c	d	磨滅
34	3	12	14	29	56	4	9	0	23

Ⅴ層出土　　Ⅰ類土器

調整手法									
外面					内面				
a	b	c	d	磨滅	a	b	c	d	磨滅
26	6	16	16	21	41	3	13	0	28



第7図　阿弥陀堂遺跡出土の土器 (1)

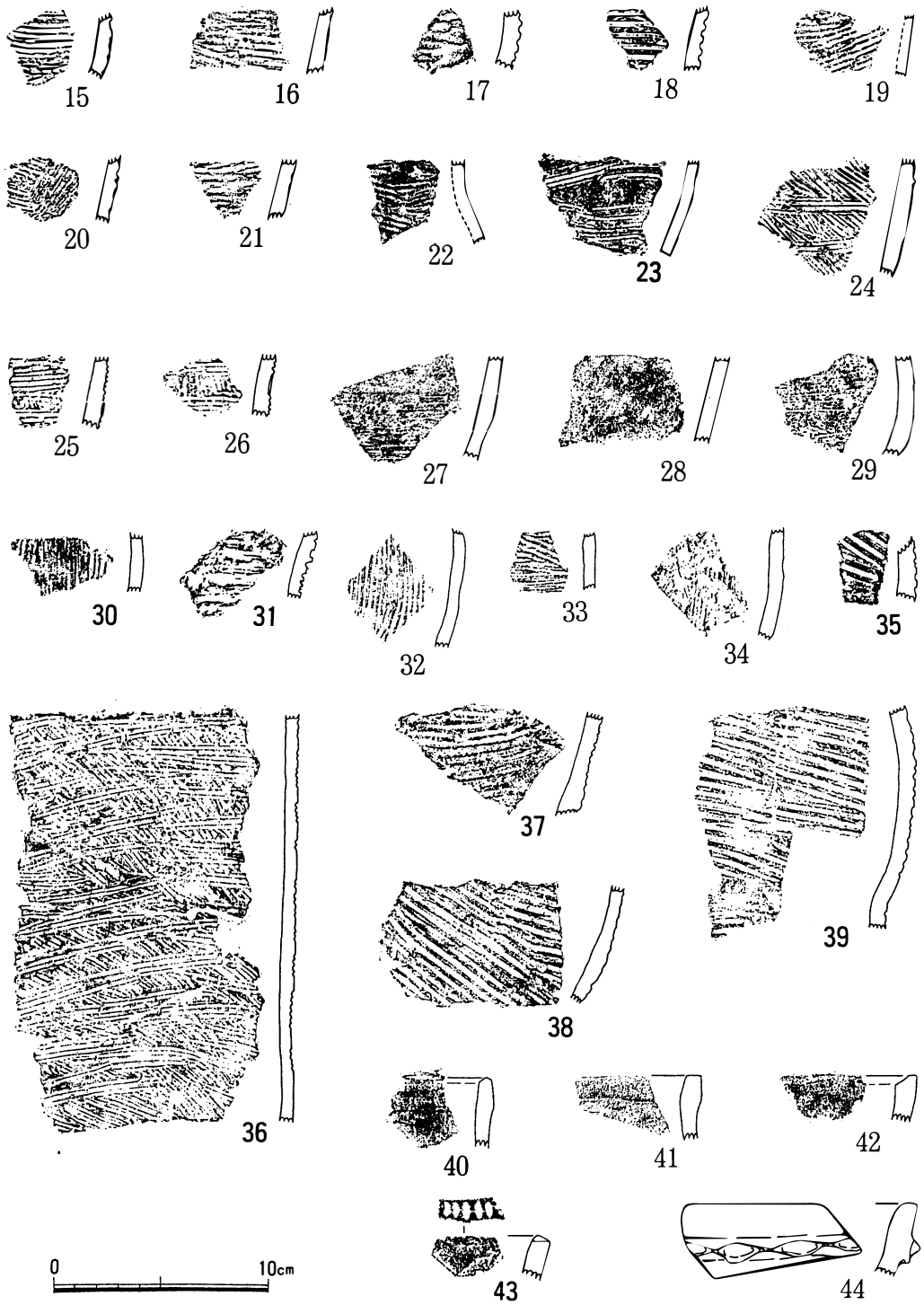
調整手法は第２表にみるようにナデ調整が圧倒的に多く、粗いミガキ・条痕調整がこれに続く。粗いミガキ・条痕調整は単斜あるいは横方向に施される場合が多いが、粗いミガキ調整のなかには縦方向に施すものも例外的に存在する。粗いミガキ調整に使用されている工具はやや幅広の丸棒状工具と思われ、いずれの破片も同様の工具痕を残す。ナデ・粗いミガキ調整は内面にもみられるが、条痕調整は内面では認められない。数は少ないものの条痕を有する破片に認められる条痕にはいくつかの種類があり、その工具は多様で二枚貝（15～19）・棒束状工具（20～26・30・36）・櫛状工具（27～29・31～34）・半截竹管（35・37～39）などを使用したと考えられる。櫛状工具を使用したもののなかには細密条痕にちかい資料も存在する（32～34）。棒束状工具による調整の痕跡を残す土器のうちには、単斜方向の条痕調整を残して、後に横方向の条痕調整を間隔を広げて施すもの（24～26・36）や、最初から間隔をあけて横方向の条痕調整をするもの（23）も見受けられる。半截竹管によって条痕調整を施した土器については後述する水神平式との区別が難しいものも存在し、その同定にはやや問題が残った。

また、文様をもつ土器のⅡ類土器の無文部の調整手法が本類の土器の調整手法とほぼ同様（ナデ・ミガキ調整）であることが予想され、このため本類の中にはⅡ類土器が混在している可能性がある。

口縁部片はⅣ層出土土器を含めても、５点が出土したのみでその量が少なく、それぞれに形態的な違いが認められる。他の胴部片の出土量と比較すると出土量が合わない印象を受ける。前述した通り、Ⅱ類土器が相当量本類に混入している可能性が高いことを裏付けているのかもしれない。40・41は端部外面がやや肥厚するのが特徴的で端部ははっきりと平坦な面を呈している。42は端部が丸みをもち、やや内傾する。43は外反気味の口縁部で、端部には刻みを施す。44は本類のなかで唯一の突帯をもつ土器である。端部から下がった位置に断面三角形の突帯をもち、その上に指による横長の〇字状の押圧を加えている。突帯より上の口縁端部は外反する。

Ⅱ類（第９図・第10図69～88、図版５・６・７）

文様をもつ精製土器。本遺跡出土土器の時期比定に参考となる土器群である。量的にはⅠ類の粗製土器とほぼ同量が存在する。文様がいわゆる工字文・浮線網状文的な文様をもつ資料が多い。これに沈線文、とくに羽状・短線の沈線文を加飾するタイプが加わる。器形は口縁部が逆「くの字」状に内傾するものが多く、このために文様帯がくびれ部より上位の口縁部に限定される資料が目立つ。なかには、阿弥陀堂Ａ地点資料３（第23図）のように器面全体を文様で飾る土器も存在する。前者の場合、文様帯以外の調整がⅠ類と同じくナデ・粗いミガキが観察されることが予想され、器形も後者との相違が認められることから別に分類するべきかもしれないが、胴部の調整方法を除外すれば、文様構成は両者に共通する要素が認められる。これは出土量が少ないことや、あえてⅠ類と分けたこの類の土器片が口縁部に限られ、器形が正確に



第8図　阿弥陀堂遺跡出土の土器　(2)

は復元できないとに起因する。とりあえず、今回は文様構成を重視し、ここに一括した。工字文・浮線網状文的文様をもつもの、沈線文を主体とする文様をもつもの、とに細別される。

ⅡＡ類（第９図・第10図67～84、図版５・６・７）

工字文・浮線文的な文様構成をもつ土器。その文様構成は２ないし３つの文様帯で構成され、三叉状の文様構成をもつものが大半である。これらの各文様の連結部には短線状の抉りを施すもの・鋭い山形を呈する瘤状の突起上に縦の刺突を加えたもの・吸盤状突起をもつものが目立ち、阿弥陀堂遺跡出土土器の特徴を示している。今回の資料の口縁部の形状は山形の突起に類似する資料は散見されるものの、茸状突起を付したものは少なく、平口縁を呈するものが多く、ややＡ地点資料と異なる。その文様構成については石川分類のa2・a3・c4類にちかいと思われ(石川1985)、陽刻部の表現は幅が太くやや雑で、断面もかなり鋭利である。この意味では、むしろ工字文的な技法にちかい。文様構成にはいくつかの変遷過程が予想され、将来の資料の蓄積を待ってさらに細分できる可能性の高い土器群である。文様構成・口縁部の形態からＡａ～Ａｇ類に細分した。

Ａａ類（第９図45～48、図版５）

口縁部が逆「くの字」状に内傾し、端部はやや直立するもの。器形は深鉢形になると思われる。端部内面は段をなして凹線をもつ。くびれ部より下の胴部にはⅠ類と同様の調整を施すと考えられ、文様帯は口縁部に限られると推測している。文様構成は口縁端部直下の文様帯（Ⅰ）とこれにより下位に位置する文様帯（Ⅱ）によって構成される。Ⅰ・Ⅱ文様帯は、最上位に位置する横走する文様によって区別される。Ⅰ文様帯は三叉文の上半の文様が１本欠けた形態をもち、むしろ眼鏡状の文様にちかい。Ⅱ文様帯はⅠ文様帯とは逆に三叉文の下半部の１本が欠け、さらにその内側にも同様の文様を重ねている。各文様の連結部は、文様帯においては抉りを、Ⅱ文様帯では吸盤状突起を使用している。45のⅠ文様帯の抉りは三角形を呈する。このために45・46のⅠ文様帯の文様構成には若干の差異が見いだせる。また、Ⅱ文様帯でも文様帯を区切る横位の文様と他の文様の連結の仕方に違いがあり、また46には吸盤状突起に連結する縦位の文様が認められるなど、両者では基本的な文様構成が一致するが、細かな点で相違する部分も認められる。

Ａｂ類（第９図49～52、図版５）

Ａａ類とは違って口縁部がやや内彎する。Ａａ類より小型の器形と考えられ、文様構成にも相違があるため、Ａａ類とは分離した。端部内面には凹線をもつが、Ａａ類と比べると断面が浅く形骸化している。文様構成は個々の土器片のなかで個体差が大きい。文様構成がＡａ類と

やや異なり、Ⅱ文様帯の下位にさらにもう１つの文様帯が認められる（Ⅲ）３つの文様帯で構成される。各々の文様帯は三叉文に類似するかあるいはこれから派生したと考えられる文様が認められる。Ⅰ及びⅡ文様帯に関係なく各文様の連結部は抉るもの、山形の瘤状突起上に縦に刺突を加えたもの、吸盤状突起の３種が存在するなど、Ａａ類とは異なる。相違する点は文様構成においても指摘できる。49はＡａ類のⅠ文様帯の下位の１本だけが認められるⅠ文様帯、三叉文が吸盤状突起で連結されるⅡ文様帯と何本かの横走する文様のⅢ文様帯によって構成される。また、端部内面の凹線の断面の形骸化が著しい。口縁部を欠損している50は、横走するⅢ文様帯と三叉文的なⅡ文様帯が認められ、49に類似する胴部片の資料と考えられる。

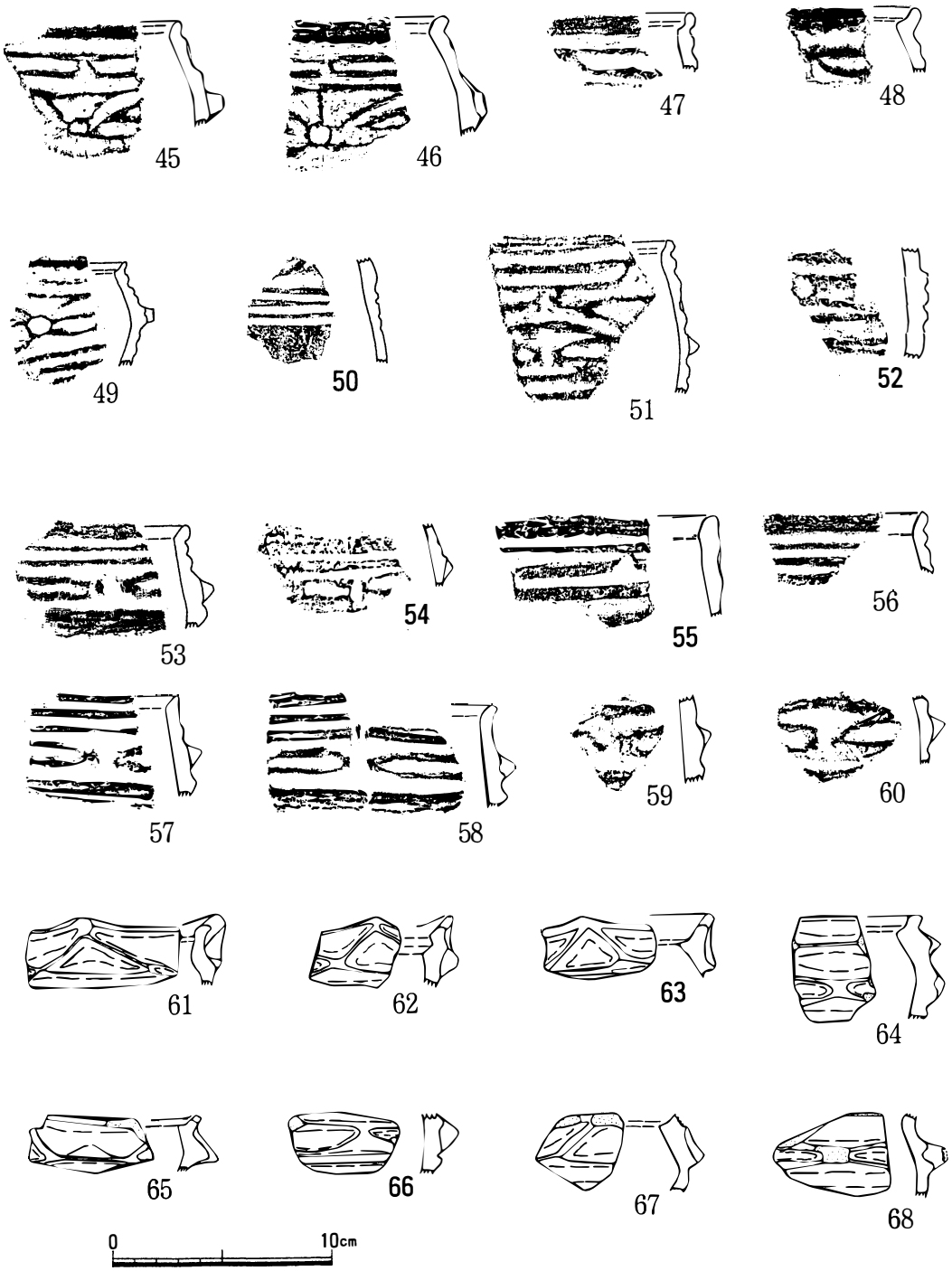
51はＡａ類のⅠ文様帯とⅡ文様帯との間にさらに文様帯を重ねる土器である。この文様帯はＡａ類でⅠ文様帯としたものと連結する部分が観察できることから、Ⅰ文様帯の範疇で理解しておきたい。51のⅠ文様帯はその上半部はＡａ類のⅠ文様帯と共通し、下半部は上半部に類似するかあるいはこれを反転した形を用いている。また、Ⅱ文様帯については眼鏡状の文様を使用し、Ⅰ・Ⅱ文様帯までを１／２単位ごとに、交互に重ねる構成をもつのが特徴である。このためにⅠ・Ⅱ文様帯の区別が不明瞭になっている。本類は後述するがＡａ類と比較して後出的要素が文様構成・端部内面の凹面に認められる。52は口縁部を欠き、その分類には悩む点が多い。文様構成がＡａ類よりも本類に近似する要素が認められるため、本類に含めた。

Ａｃ類（第９図53～60、図版６）

口縁部が内傾して立ち上がり、器形はＡａ類に類似する。端部は垂直となるかやや外反し、端部内面には凹線が認められないものを本類とした。文様構成は53のような資料が基本となると考えられるが、相違するものも存在する。Ａａ類と同じく、Ⅰ・Ⅱ文様帯で構成され、53・54は横走する文様、55はＡａ類のⅠ文様帯の文様を使用している。Ａａ・Ａｂ類と比べれば、Ⅰ文様帯が直線化する傾向が看取できる。53・54のⅡ文様帯は眼鏡状の文様帯が認められ、連結部には山形状突起の上を刺突している。このような手法で文様を連結する破片（56・57・58・59・60）が多く認められ、他の文様が明らかではないが、本類とした。この手法が本類の大きな指標の１つとなる可能性が高い。55はⅠ文様帯の構成・連結部の手法はＡａ類と共通し、本類と合致しない要素も認められるが、器形およびⅡ文様帯が直線化していることから本類とした。

Ａｄ類（第９図61～68、図版６）

口縁が山形ないしは波状をなし、そこに抉り・ミガキを施して三角形・眼鏡状の文様をもつもの。その形状は各々に形態的な相違を有し、横長（61）・縦長（62）・眼鏡状（63・64・65）など様々である。各単位の連結部も間隔をあけるもの（65）・直結するもの（62）などの違い



第９図　阿弥陀堂遺跡出土の土器 (3)

が認められる。調整手法はＡａ～Ａｃ類と比較して、精緻なミガキを施すものが多い。口縁端部内面にはいずれも凹線をもつが、それが明瞭に認められるもの（63・64）と形骸化したもの（61・62）の２種が認められる。口縁端部の破片が少量存在するのみで、器形は明らかにすることはできないがＡ地点資料（第23図３）のような小型の器形であることが予想される。肩部に位置すると考えられる眼鏡状の文様をもつものも本類に含めた。口縁部の文様に類似すること、小型の器形と想定されることから本類としたが、器形・文様構成が明らかになれば別に分類すべきかもしれない。64は２つの文様帯をもち、下位に位置する眼鏡状の文様がＡａ～Ａｃ類の眼鏡状の文様と比べると形態が大きく異なり、調整手法が本類の口縁部と類似するため、他類とは区別し本類に含めた。本類は、器形及び全体の文様構成が明確でないために不安定な一群であることを断っておく。

Ａｅ類（第10図69・70、図版６）

山形突起をもつ口縁と口縁直下に横走する文様をもつものを取りあえず本類に分類した。端部内面には凹線を有する。69は突起上に三角形の抉りをもち、端部は平坦面をなす。69の陽刻が工字文的であるのに対して70は陽刻の断面が低くやや浮線文的である。両者とも認められる文様より下位の文様が明らかではなく、器形・端部内面の凹線など他類と共通する要素をもち、とくにＡａ類との相関関係が深い。不明な部分の文様構成によってはＡａ類や他の類に含められるべきかもしれない。

Ａｆ類（第10図71～73、図版６）

浮線文的技法を用い、その陽刻がＡａ～Ａｄ類とは違って細く精緻で、中部高地系の浮線網状文に類似するために、別系統として分離した。71は内彎気味の口縁・端部内面の凹線・文様構成などＡｂ類と共通要素が多く認められる。Ⅱ文様帯の文様は三叉文の中央の文様が欠如した形をとり、これを１／２単位ずつ交互に配置する構成をとっている。72には眼鏡状の文様が認められ、非常に丁寧なつくりの土器である。73は文様が細線化し、器形がくびれる異質な土器である。文様には縦に区切っている部分が認められる。例外的な存在として本類に含めた。

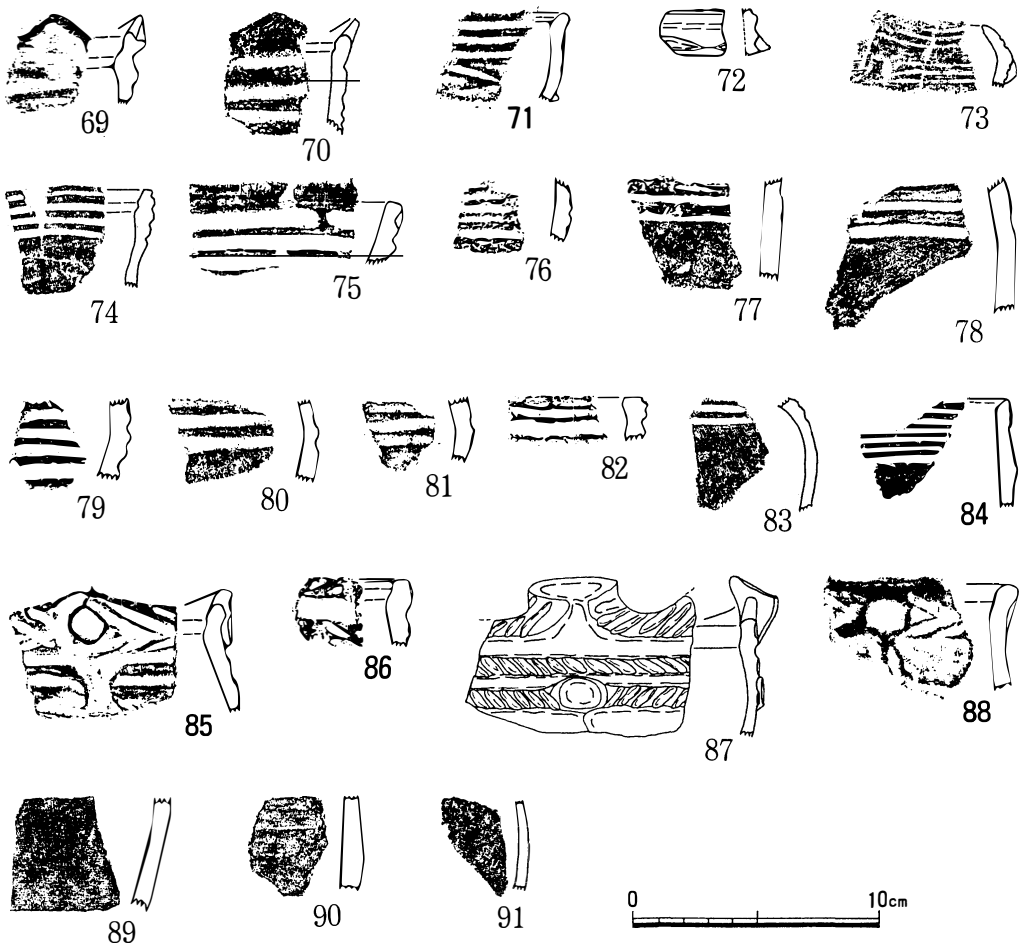
Ａｇ類（第10図74～84、図版７）

前記の分類に相当しない土器片を本類で一括した。２・３本の横走する陽刻もしくは沈線によって構成されるものが大半である。74・75のように端部に平坦面をもつ平口縁と口縁直下に横走する文様をもつものが基準になると考えられる。74は端部内面に細い沈線が、75が文様の一部に途切れる部分が認められる。文様の施文技法が工字文的な要素を残しているもの（74・75・76・77）から沈線（78・79など）まで存在し、個々の土器の個体差が著しい。器形におい

てもいくつかの種類が推測可能で、将来の検討が必要な一群である。

ⅡＢ類（第10図85～88、図版７）

沈線・短線を主体とする文様構成をもつ土器を一括した。口縁部が内傾し端部内面には凹線を有する。器形はＡａ・Ａｃ類に類似し、端部内面の凹線は明瞭なもの（85・86）と形骸化したもの（87・88）とが存在し、それぞれＡａ・Ａｂ類と共通する要素をもつ。文様は端部またはそれ以下に位置する帯状の隆帯に羽状（85・88）・斜位（86・87）の短線を施し、Ａａ類・Ａｂ類と同じく吸盤状突起を付ける。87の文様構成は口縁直下の横位の沈線とその間に施す斜位の短線で構成され、短線の方向が吸盤状突起を境にして逆となり、上段の文様帯の短線と同方向となる部分も認められる。口縁部には茸状突起が付随する唯一の資料である。85は上段の文様は羽状の短線と吸盤状突起、下段には工字文的文様をもつ。その文様はＡｂ類のⅡ文様帯



第10図　阿弥陀堂遺跡出土の土器　(4)

のモチーフにも類似するが、連結部は認められない。

本類はＡａ～Ａｃ類に共通する部分が多く、その関係の深さを類推できるが、文様構成は大きく異なっているため、ⅡＡ類とは別の土器群とした。しかし、文様構成の細部については本類のなかにも違った点も認められる。Ａ地点の資料をみても、かなりバラエティーに富み、さらに細分が可能な土器群と考えられる。

Ⅲ類（第10図89～91、図版７）

器面の内外面に精緻なミガキが確認でき、無文の精製土器と想定できるものを本類とした。点数８点と少ない。胴部片ばかりで器形には不明な点が残るものの、おそらく壺もしくは浅鉢にちかい器形になると考えられる。

Ⅱ期

弥生時代前期と考えられる遠賀川系土器と条痕文系土器群を該期に相当するものとして分類した。一部に遠賀川系・条痕文系土器に含まれない異系統の土器も該期の土器として含めた。

Ⅳ類（第11図92～102、図版８）

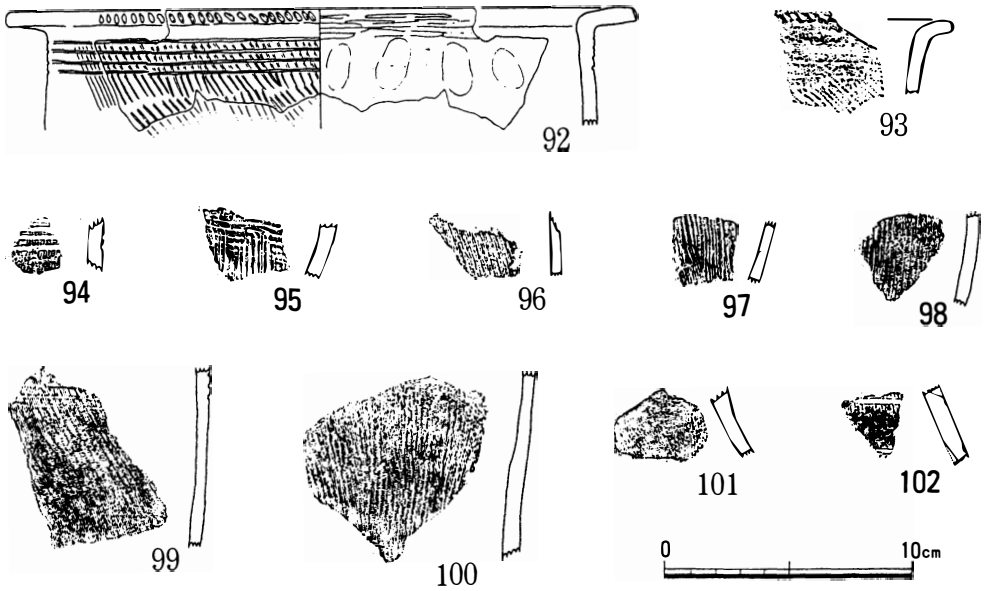
遠賀川系土器を一括した。壺形と甕形が認められるが、壺形と分かるものは２点のみでこれ以外は甕形になるものと考えられる。甕形と壺形を分けて記述する。

ⅣＡ類（第11図92～100、図版８）

遠賀川系土器のうち器形が甕形になるものを本類とした。そのほとんどが細片の胴部片で、外面に縦位のハケ目を残している。口縁部片は２点が出土した。92・99は口縁部から胴部までが判明する好資料である。その口縁部は逆Ｌ字状を呈し、やや肥厚している。端部には半截竹管による刺突が加えられ、胴部にも半截竹管による２本１組の沈線が２組めぐる。沈線以下はハケ目で調整され、口縁部内面はわずかにミガキ調整が観察できる。胎土は赤褐色を呈し、上記の特徴も合わせて、亜流の遠賀川系土器に比定できる。93は92と口縁部の形態が異なり、やや短く外反する。その他の口縁端部の刻み・胴部の沈線・調整手法は92と同様である。

ⅣＢ類（第11図 101・102、図版８）

遠賀川系の壺形土器。細片のため同定が難しい土器も存在し、確実なものは２点のみである。101は頸部の破片と考えられ、縦位のハケ目調整の痕跡が確認できる。磨滅が激しいため不明瞭だが、ハケ目は一次調整として使用され、二次調整にミガキが施された可能性が高い。102は壺の肩部の破片で２本の横位の沈線を有する。この沈線の両側にはハケ目調整の痕跡が残さ



第11図　阿弥陀堂遺跡出土の土器　(5)

れている。資料数は少なく口縁部片などの好資料も存在しないことから、断定はできないが、ⅣＡ類と時期的には大きな差はないと考えられる。

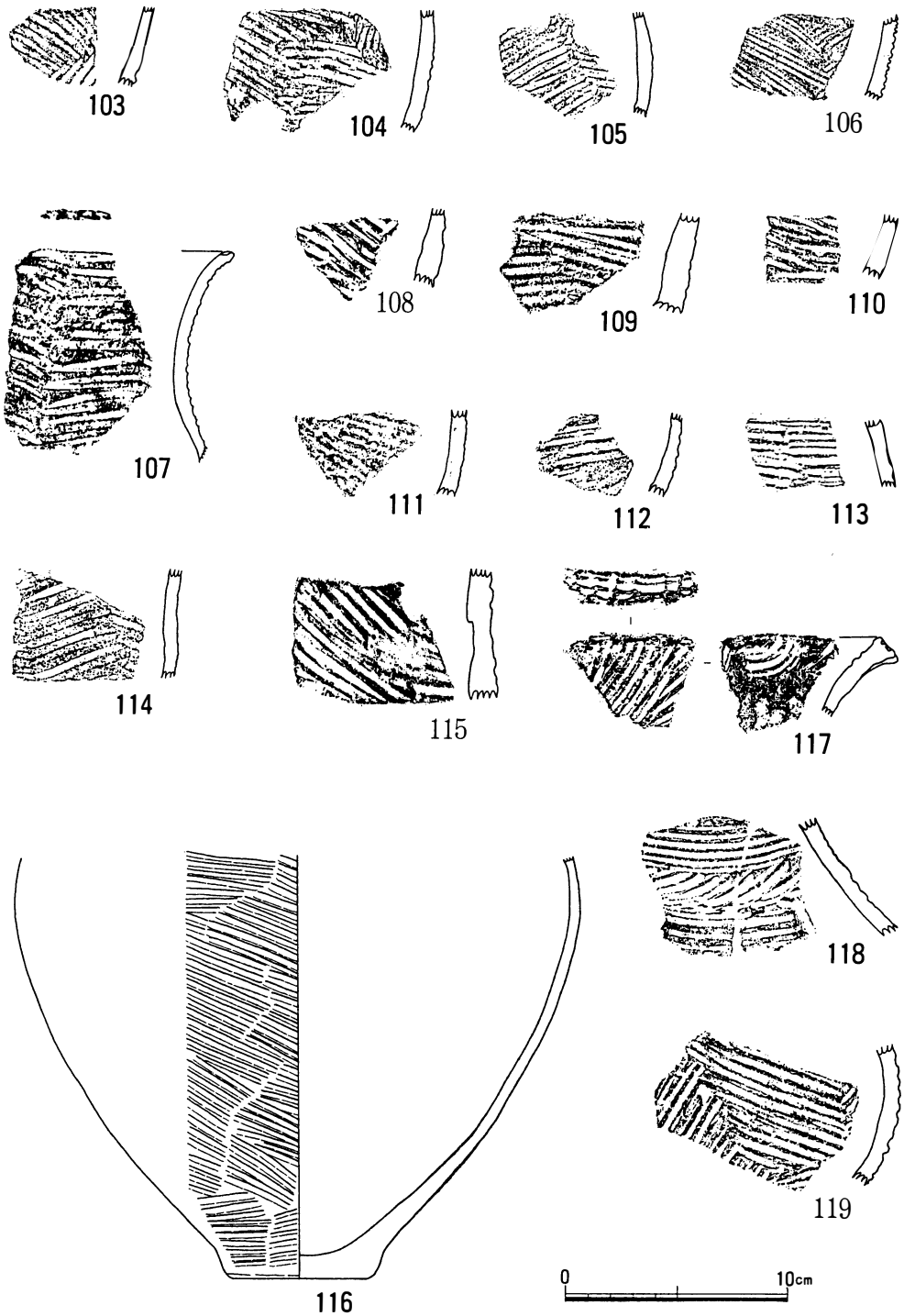
Ｖ類（第12図 103～119、図版９）

条痕文系の土器を一括した。器形には壺形と甕形がみられるが、量はそれほど多くはない。一部にＩ期の条痕と区別が困難なものも存在する。

ＶＡ類（第12図 103～116、図版９）

条痕文系土器のうち器形が甕形を呈するもの。断片的資料が多く、器形の全容を知り得たわけではなく、条痕の形態とその方向によって本類と判断したものも多い。条痕の方向は羽状をなすものが多くみられ（103～106)、その他に単斜状の条痕も認められる（108～113・115～116)。単斜状の条痕を残すものはすべて半截竹管によるもので、羽状条痕を残すものの多くはヘラ状工具を使用している（103～105)。 107（114は同一個体）は口縁部片で口縁部が緩やかに外反し、端部には刻みが施される。胴部にみる条痕はヘラ状工具が用いられ、その方向は単斜状にもみえるが中央で方向を変え、羽状にちかい部分も観察できる。器壁の薄いのが特徴である。本類は時期的には水神平式のなかでも新しい時期が考えられる。

ＶＢ類（第12図 117～119、図版９）



第12図　阿弥陀堂遺跡出土の土器　(6)

条痕文系土器のうち器形が壺形をなすもの。ＶＡ類と同様、断片的資料が多い。117は口縁部が強く外反し、端部には半截竹管による押引きがみられる。内面には連弧状に沈線が連続する。118は頸部の破片で横位の条痕間に跳ね上げ文にちかい斜位の条痕が施されている。119は破片のカーブから考えて壺の胴部片と考えられる。Ａ類と違い、半截竹管による羽状条痕が確認できる。

Ⅵ類（第13図 120～139、図版10）

Ⅱ期に比定できる土器のうちⅣ類ないしＶ類に分類できない異系統の土器。器形が壺形となること・口縁部と胴部に文様をもつことを大きな特徴とする。Ⅰ期・Ⅱ期を合わせて、今回の調査で最も多く出土した土器群で、Ａ地点資料では明らかとなっていない。その多くは従来より大地型と呼ばれているものと類似する。

器形は口縁部が強く外反し、肩部が強く張る壺形を呈する。波状口縁をなすものが多い。肩部には段差を有し、ここに刺突文を施すものが認められ、頸部との境を強く意識している(138・139)。

文様は口縁部及びその端部・内面、胴部に施文されている。口縁部の文様構成は互いに向かい合う２条の沈線による連弧状の文様が多く、このなかの中央に横沈線２本、短線２本、あるいは半円形の文様がそれぞれ組み合わせて加えられる（120・121・123・125・139)。これとは別に 139では端部外面に連弧状の沈線が２本施文されている。端部の文様は、縦方向の細かな刺突文のみのもの（126)、刺突の両側に端部と平行する鋭い沈線を施すもの（121)、縄文を施文するもの（139)、波頂部に円形の押圧を加えるもの（120）など多様である。また、121・124は口縁部の文様と類似する構成が用いられ、121は口縁部文様の下半部が欠けたような構成である。胴部の文様は基本的な構成要素において連弧状の文様モチーフを使用し、口縁部の文様に類似する傾向が看取できる。それは 138・139の胴部文様で確認することができる。139では向かい合う連弧状の文様が連結し、この中央に横沈線を組み合わせて１つの単位を構成し、２～３段にわたって施文されていたと考えられる。上段の肩部の文様は上半分の文様を欠いた構成をとっている。これら連弧状の沈線によって区画された範囲外には縄文が施され、区画内は無文帯となっている。この連弧状の文様が一様に胴部にめぐらされるのではなく、一部に縦長の長方形の無文帯が沈線によって区画されていた部分も確認でき、全体の文様の構成がかなり複雑であったことが推測できる。 138は連弧状もしくは菱形の文様を形成し、その内側を無文帯としてさらに円形の文様を充填する。この円形の文様の内側・菱形の文様の外側は刺突文によって飾られている。胴部の文様の全体構成を知り得るのは上記の２点のみで、その他は破片が殆どである。上記の２点や口縁部の文様に類似する破片は他に、127・129などが存在する。

130は沈線区画内に刺突文、さらに瘤状の突起をもち、128・131には沈線間に刺突文または縄

文を施文する。これらの資料は 138・ 139などの例と比較すると沈線とその他の文様の関係がやや異なり、胴部文様も口縁部文様と同様、いくつかのバリエーションが存在するようである。

口縁部・肩部にみられる刺突文も本類の重要な要素である。刺突文は 121・138・139にみられ、口縁部・肩部を明確に区画すると同時に文様帯も区画しているようである。138の胴部下半に横走する刺突文は胴部文様帯の上限を示している。これらの刺突文は139を除けばその両側に、沈線が引かれることが多い。139の肩部の刺突文は刺突の上に沈線が認められる。とくに肩部の刺突文・沈線の使用は器形にみる肩部の段差と深い関連性をもつことが考えられ、本類の大きな特徴の１つである。

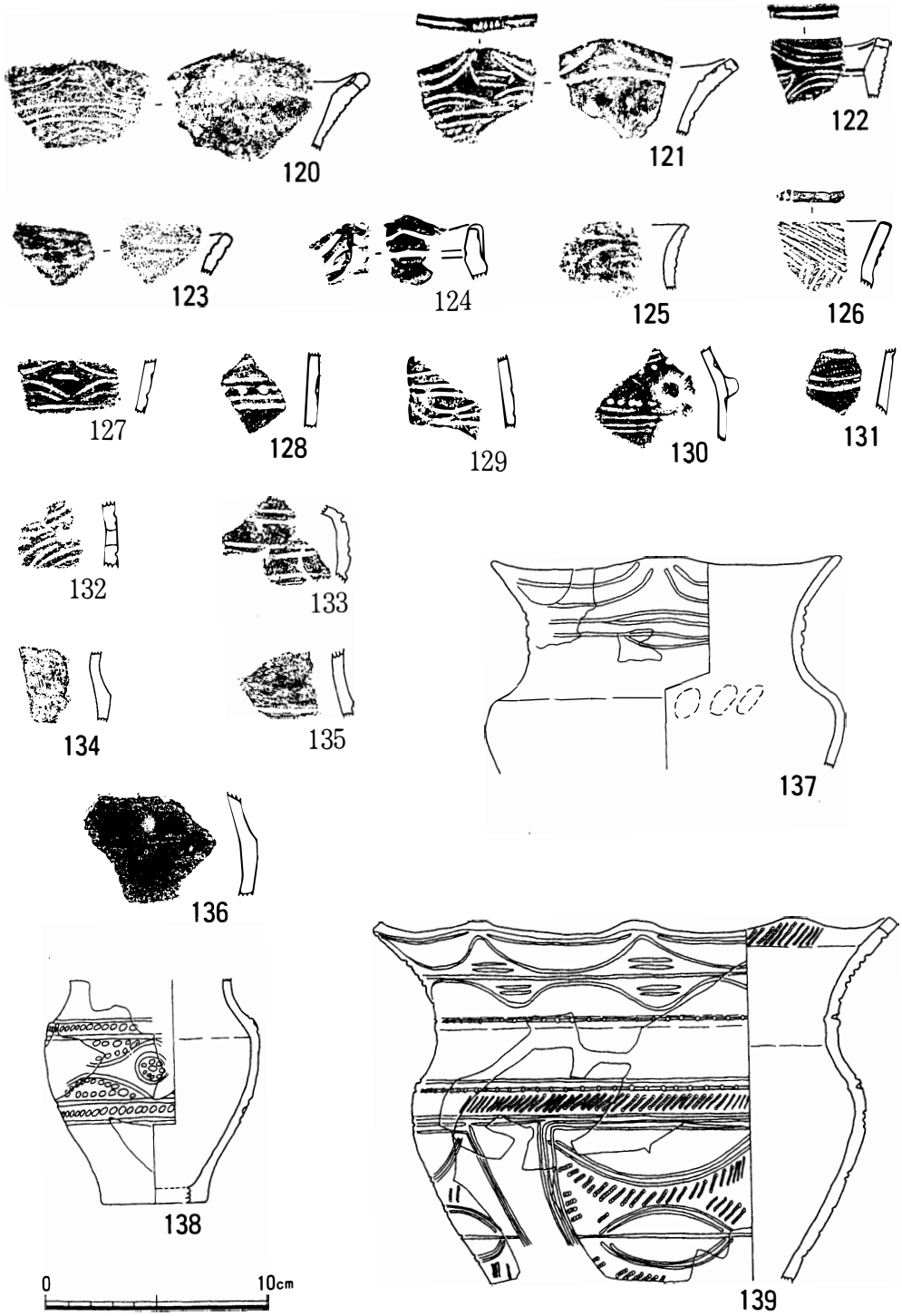
以上、述べてきた観点からすれば、例外的に異なる要素が認められる資料に、126・137が認められる。137は肩部に段差および刺突文はなく横沈線が２～４本認められるのみである。その他、口縁部の文様は連弧状の文様が向かい合わないこと、胴部の文様を欠くことなども、本類のなかでは異質な要素である。器形あるいは文様が単純化する傾向が観察でき、こうした特徴は前述の資料と比較するとやや後出的である可能性が高い。126は口縁部片でその文様は鋭い沈線によって羽状を呈する。文様は本類には認められない要素だが、その他の調整手法・端部の刺突が本類と共通するため、本類と判断した。

本類の土器は土器自体にみる特徴だけでなく、本遺跡出土土器のなかでも最も出土量が多いことも本類の重要な特徴である。口縁部片で観察する限り、７個体分程度を確認することができる。他の類には口縁部片が少なく、大きく接合する資料がないことも加えると本類の土器が量的に突出していることがうかがえる。本類の出土量の偏りが該期にみられる通有の現象かそれとも偶然の結果なのか不明な点も多く、この点については問題点として残しておきたい。

Ⅳ層とⅤ層出土土器の関係について

Ⅳ層とⅤ層から出土した土器を類似性が強いとして一括して分類したが、各分類の土器とⅣ・Ⅴ層の関係を第３表のように示した。

個数の多少はあるが、それぞれの分類の土器がほぼⅣ層・Ⅴ層のどちらにも存在する。これとはまったく別の時期に比定できる土器片は認められないことから、Ⅳ層は攪乱を受けているもののⅤ層と同一時期の土器片しか含まない層位として考えることが可能で、むしろⅤ層を削平した結果と理解したい。Ⅳ層にしか認められないものとしてⅡＡａ・ⅡＡｅ・Ⅲ類が上げられる。ⅡＡｅ・Ⅲ類はいずれも全体像が不透明な土器片ばかりで不明な点も多く存在するが、ⅡＡａ類は阿弥陀堂出土土器の１つの指標をなす土器であり、Ａ地点資料との関連性を考える上で重要な位置を占める土器群である。その意味ではⅡＡａ類がⅤ層から出土しなかったことは残念な結果といえる。このことは今回の調査範囲が狭いことに原因を求めた方が無難で、時期差につながるものではないと考えられる。



第13図　阿弥陀堂遺跡出土の土器　(7)

第３表　第Ⅳ層と第Ⅴ層の土器出土状況

Ⅰ　期

分類	Ⅰ	Ⅱ								Ⅲ
		Ａａ	Ａｂ	Ａｃ	Ａｄ	Ａｅ	Ａｆ	Ａｇ	Ｂ	
Ⅳ層	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Ⅴ層	◎		○	○	○		○	○	○	

Ⅱ　期

分類	Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ
	Ａ	Ｂ	Ａ	Ｂ	
Ⅳ層	○	○	○	○	◎
Ⅴ層	○	○	○	○	◎

◎：顕著に認められる

○：認められる

第３節　石器類（第14～16図）

石器類の出土状況は、第Ⅰ層から第Ⅴ層まで散在していたが、打製石斧が第Ⅴ層では、少ない点が指摘できる。出土した石器類は、石鏃７点、石錐６点、ピエス・エスキーユ６点、ヘラ形石器３点、削器２点、掻器１点、ＲＦ７点、ＵＦ14点、石核９点、フレイク類 223点で、これらの石材は、すべて下呂石であった。その外に打製石斧７点、横刃形石器１点、磨石１点の合計　287点である。

石鏃は、無茎の基部に半円形の抉りのあるもの（１）、わずかに抉りのあるもの（２・３）、平基式のもの（４）、有茎式のもの（５）がある。５のように、側縁に段を有して、五角形になるものは、縄文晩期に多いようである。

石錐は、つまみを有するもの（７）、棒状を呈し、両端に尖頭部をもつもの（８）、おなじく尖頭部が一端にあるもの（９）、剥片の一部に尖頭部を作り出したもの（10・11・12）の各種

がある。

やや分厚で寸ずまりの縦長剥片の両側を折り取り、その面をそのまま利用した狭小な側面を持ち、長軸方向一端に刃部を持つ石器をヘラ形石器とした（18・19）[1)]。

剥片に二次加工を施すが、刃部を形成していないものをＲＦとし（22）、素材の鋭い縁辺に残された剥離痕が、「刃こぼれ」状を呈するものをＵＦとした（23・24）。

石核の26は、円礫を分割したような厚みのある剥片を素材とし、平坦な剥離面を打面とし、打面転移をせずに剥片剥離作業を進行させている。27は、厚手の板状剥片を素材とし、周辺部の平坦な剥離面を打面として剥片剥離作業を行い打面転移を行っている。

打製石斧は、短冊形が多く、石材は、凝灰岩が多い。31は、抉りが入っているようであるが、全体の器形は不明である。32は、いわゆる横刃形石器と思われる。

〔注〕

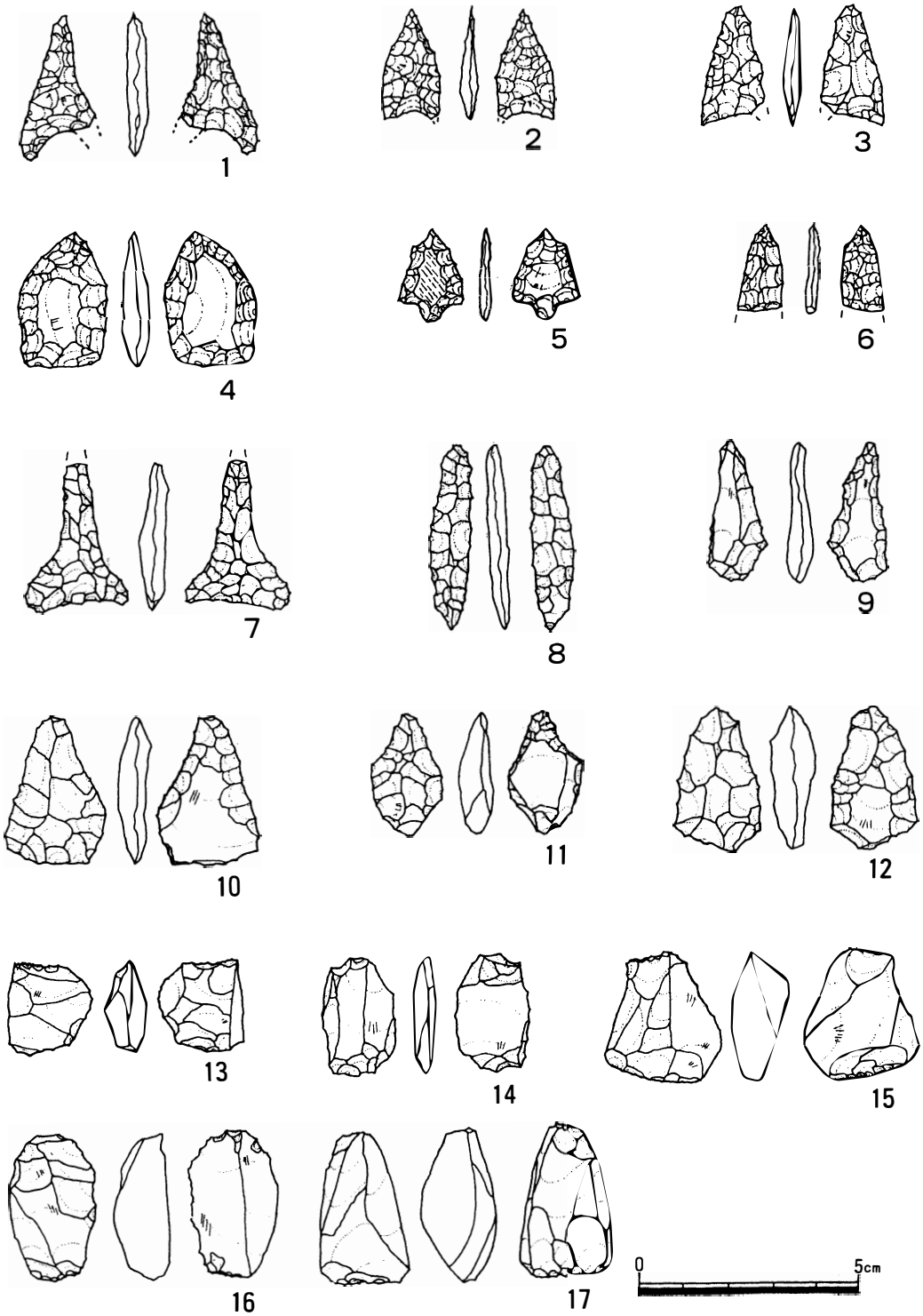
１）文献（岐阜県教委1991）を参照した。

第４節　陶磁器

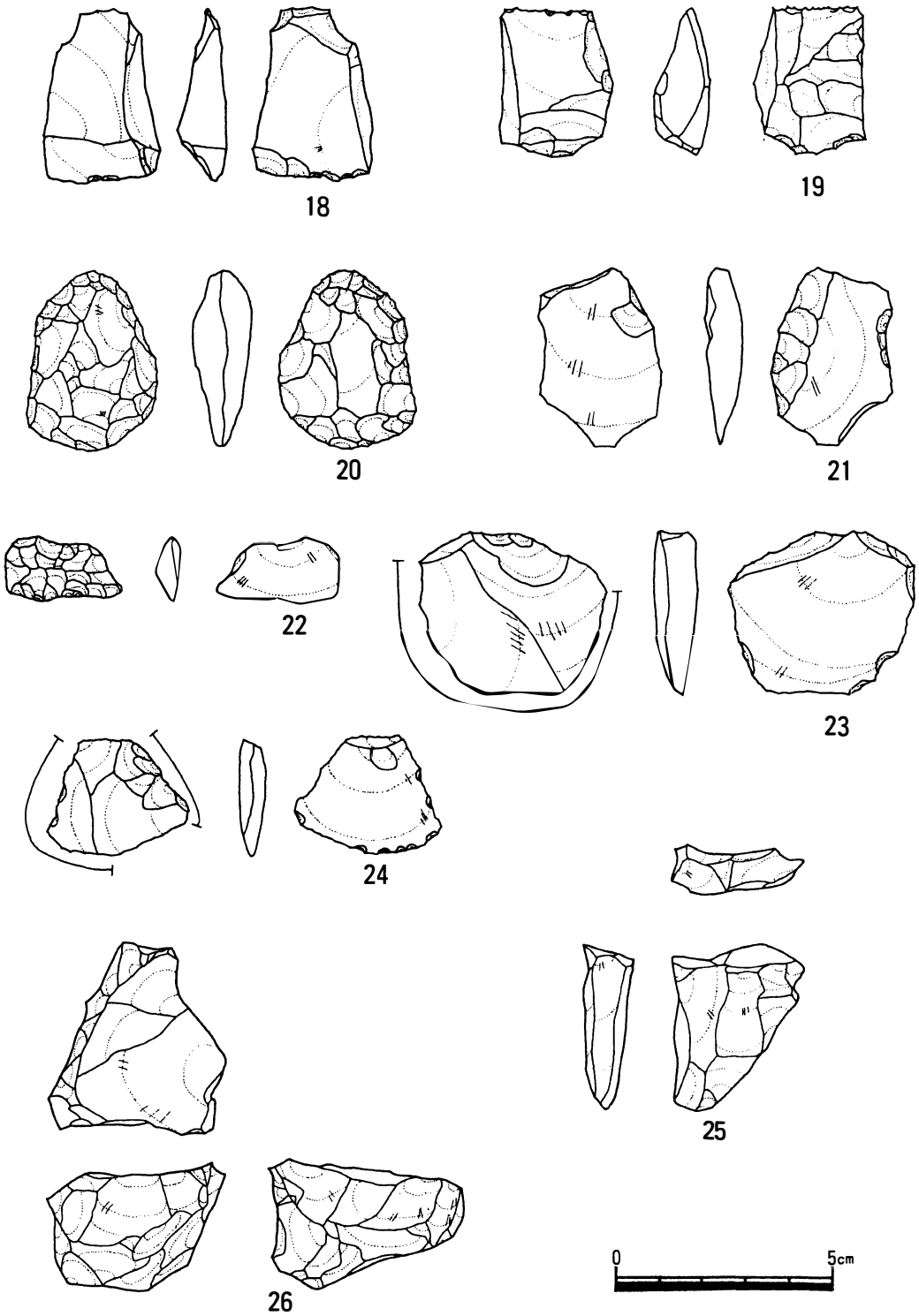
陶磁器類は、いずれも破片ばかりで、計15点出土している[1)]。主として第Ⅱ層から出土していた。近世の椀・皿・擂鉢等である。瀬戸・美濃系が多いと思われるが、在地のものや越中のものもあるかもしれない。図示したものは、３点のみである。１は椀で、口縁部が直立しており、内外面に灰釉および、外面下半部に鉄釉が施されている。器厚は４㎜で、貫入が見られる。瀬戸製で、18世紀のものであろう。２は皿で、口縁は開き気味に立ち上がる。器厚は３㎜で、灰釉がかかっている。３は擂鉢で、擂目は７条である。産地は不明であるが、18世紀のものであろう。

〔注〕

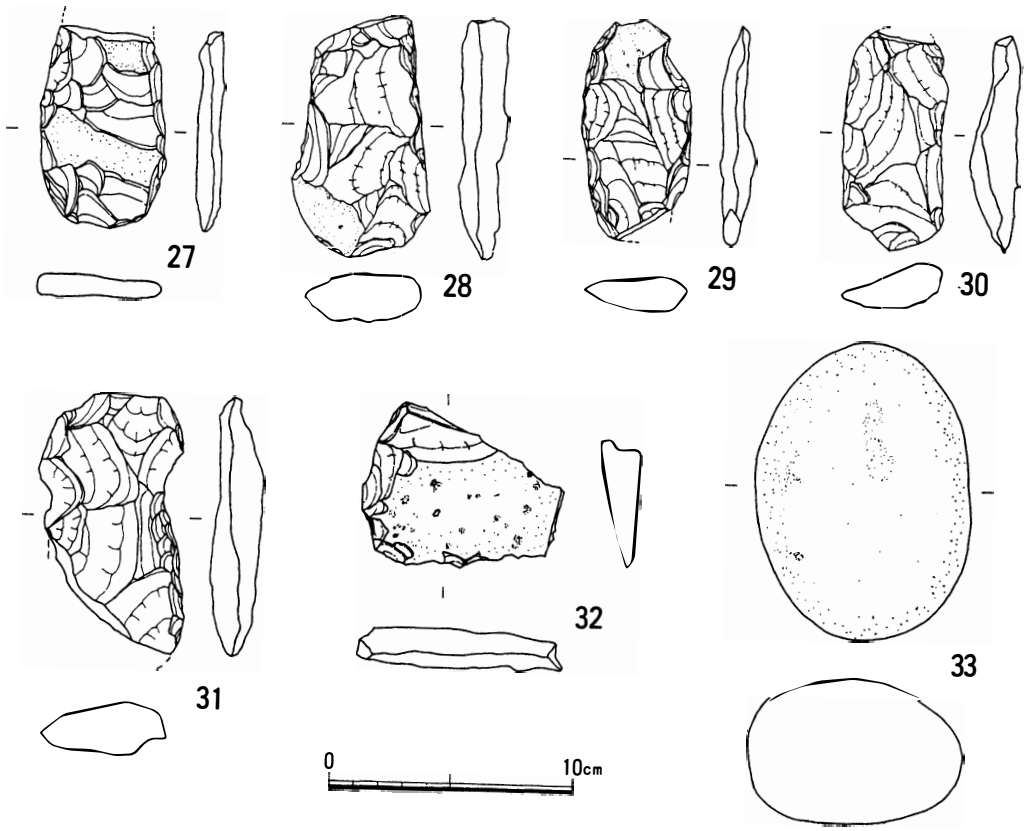
１）宇野隆夫氏（富山大学人文学部教授）にご教示を得た。



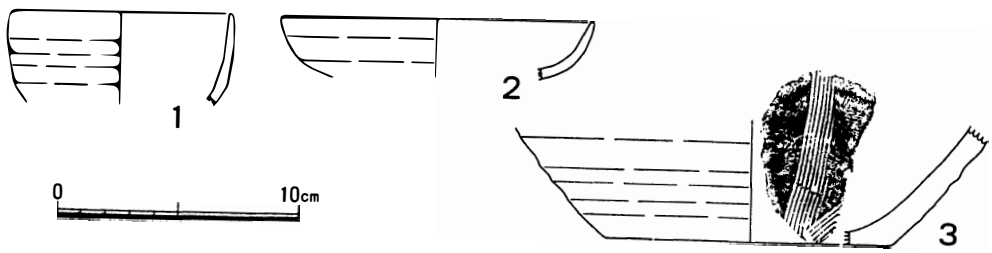
第14図　阿弥陀堂遺跡出土の石器　(1)



第15図　阿弥陀堂遺跡出土の石器　(2)



第16図　阿弥陀堂遺跡出土の石器　(3)



第17図　阿弥陀堂遺跡出土の陶磁器

第４章　深作裏垣内遺跡の調査

第１節　基本的層序および遺物の出土状況

前章までにふれたように、今回の発掘調査による遺物の出土状況は、35列目以西で濃密であり、地形の状況から見て、便宜的に２つの遺跡の境界をそこに定めた。しかし、『飛騨の考古学Ⅰ』によると、「ミヨサ畑と呼んでいる地点」が指摘されており、今回の調査で深作裏垣内遺跡出土の遺物としたものの中には、本来の遺跡の所在地とは、やや地点を異なるものも含んでいることを前もってことわっておきたい。

発掘調査地点の現況は、畑地および水田であった。基本的な層序としては、次の４層からなる。まず第Ⅰ層は耕作土である。畑地では、黒褐色の砂礫土で径２～３㎝の小礫を含んでいる。水田では、黒褐色あるいは赤褐色の粘質土の層である。厚さは約20～30㎝である。

第Ⅱ層は、黒褐色あるいは暗褐色を中心とした色調の砂質土であり、第Ⅲ層は、黒色砂質土を中心とした土層で第Ⅱ層よりしまりがよい。それぞれ20～40㎝程度の厚さである。第Ⅳ層は、黒褐色の砂礫土で径２～３㎝の小礫を含む。約10㎝の厚さである。

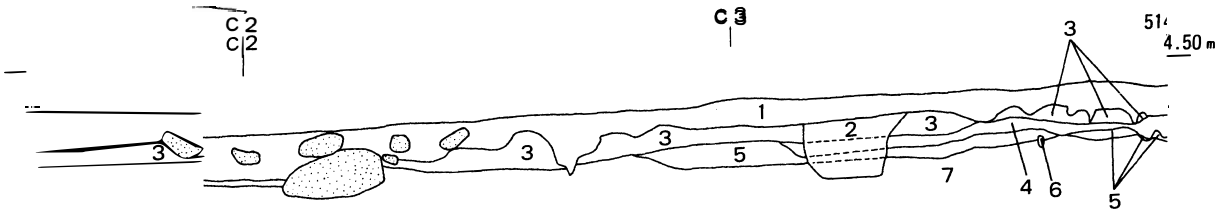
遺物に関しては、土器は、13列目以西の第Ⅲ層および第Ⅳ層でわずかに出土し、28列目から比較的多かったが、34列目以西と比べるとはるかに少なかった。石器類は、５列目以東の第Ⅰ層からと15列目以西の第Ⅲ層を中心に出土した。

第２節　土器（第19図）

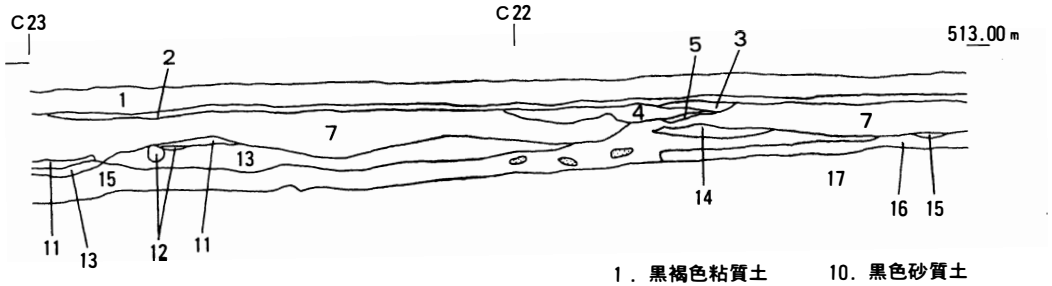
出土した土器は23点である。いずれも細片ばかりでまとまった資料がない。１～３は、いずれもＬＲの縄文を施している。器厚は６～７㎜程度である。４は、黄灰色を呈し、器厚７㎜で焼成は良好である。矢羽根状の沈線が横走している。

条痕文系土器もいくつか見られる。５・６は、条痕が横方向に施されている。原体は貝と思われる。７は、ヘラ状工具による条痕で、途中で方向を変えている。水神平式と思われる。出土地点はＣ31区であり、「深作裏垣内遺跡」出土と扱うには注意を要する。

以上のものから時期等を判断するのは困難であるが、縄文中期・後期中葉・晩期末から弥生前期にかけての土器片と見ることができよう。

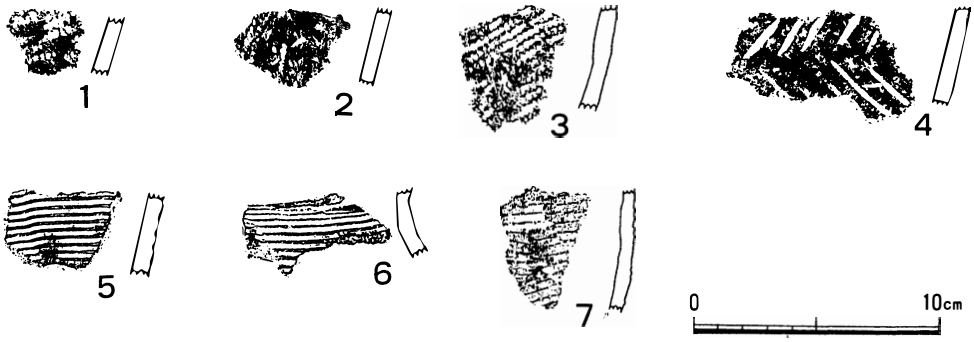


1．黒褐色砂礫土
2．灰黄褐色砂礫土
3．黄褐色砂質土
4．灰黄色砂質土
5．黒褐色砂質土
6．暗褐色腐植土
7．黄褐色砂質土



1．黒褐色粘質土
2．赤褐色粘質土
3．暗褐色砂質土
4．黒褐色砂質土
5．灰褐色砂質土
6．暗褐色砂質土
7．黒褐色砂質土
8．灰褐色砂質土
9．黒色砂質土
10．黒色砂質土
11．灰褐色砂質土
12．黒褐色砂質土
13．黄褐色砂質土
14．黒色砂質土
15．灰黄褐色砂質土
16．黒褐色砂礫土
17．黄褐色砂礫土

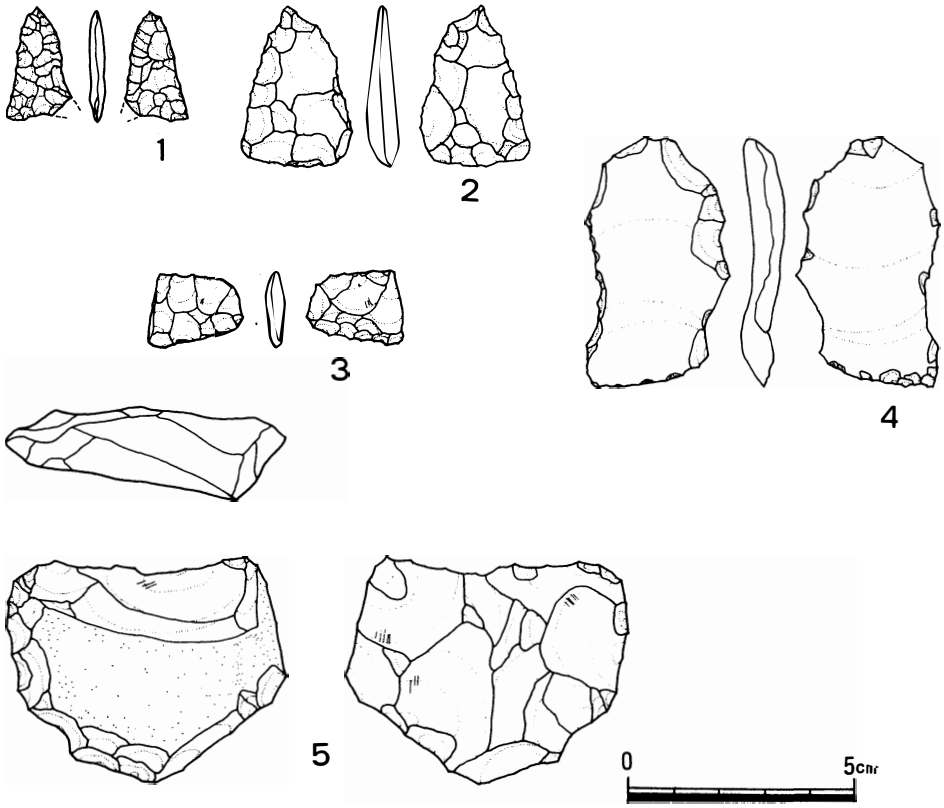
第18図　深作裏垣内遺跡の土層図



第19図　深作裏垣内遺跡出土の土器

第３節　石器

出土した石器は、石鏃１点、石錐１点、ピエス・エスキーユ１点、削器１点、石核１点、フ

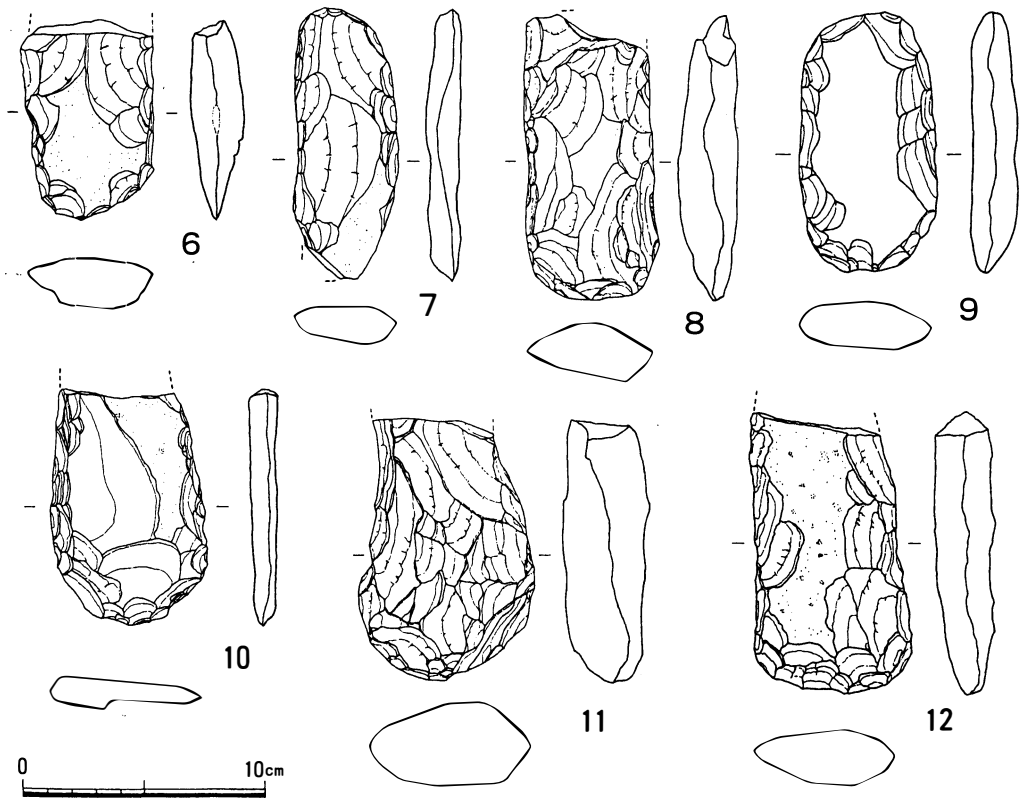


第20図　深作裏垣内遺跡出土の石器　(1)

レイク類7点、打製石斧10点の計22点であり、阿弥陀堂遺跡と同様で、打製石斧以外の石材はすべて下呂石であった。

1は、石鏃で、基部にわずかに抉りがある。2は、石錐で、剥片の一端に尖頭部がわずかに作り出されている。3はピエス・エスキーユで横長剥片を利用している。4は削器で、縦長剥片を利用しており、側辺および端部に刃部を形成している。5は石核で、厚手の板状剥片を素材とし、打面が転移して、残核がレンズ状を呈する。

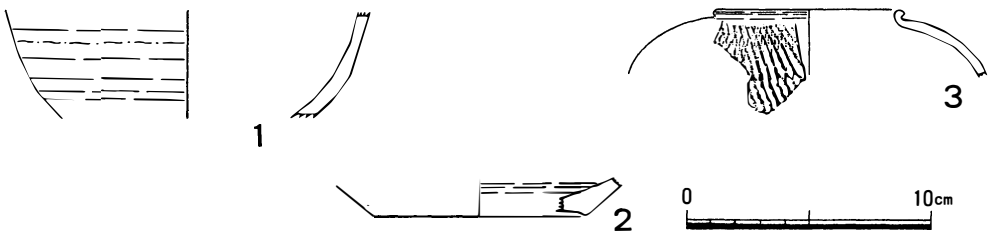
打製石斧は短冊形が多いが、撥形（11）もある。石材は、すべて凝灰岩である。



第21図　深作裏垣内遺跡出土の石器　(2)

第４節　陶磁器

近現代の陶磁器類３点を除くと、近世の陶磁器類が８点出土している。産地不明の陶器片が２点あるが、他は瀬戸・美濃系のものが６点ある。図示したのはいずれも後者のものである。１は椀である。内面および外面上部に灰釉が施されている。貫入が見られる。２は皿の底部である。内面に鉄釉が施されている。３はいわゆる松皮土瓶の口縁部で鉄釉が施されている。



第22図　深作裏垣内遺跡出土の陶磁器

第５章　考　察

第１節　阿弥陀堂遺跡出土の土器について

今回の調査で出土したⅠ期に相当する土器群は昭和26年度の調査において出土した土器群と類似し、その報告の際に大江氏より阿弥陀堂式が提唱されている（大江㊟1965）。以来、飛騨地域における縄文時代終末期の様相を示す土器群の貴重な例として注目を集めてきた。その理由としては飛騨地域において該期の好資料が本遺跡を除いて確認されていないこと、粗製土器と工字文・浮線文系の精製土器がセットとして出土したことがあげられる。なかでも粗製土器の壺形土器と精製土器との共伴関係？はその時期比定をめぐって未だに安定しておらず、研究者によって見解が異なるようである。

すでに明らかにされているＡ地点資料（第23・24・25図）と今回調査したＣ地点を合わせて、阿弥陀堂遺跡出土土器の内容をより精緻なものとする意味で、若干の検討を加えておく。

Ⅰ期

大江氏が阿弥陀堂式を設定された根拠を示すと下記のようになり、これは阿弥陀堂遺跡出土土器の特徴を明示するものとして理解できる。

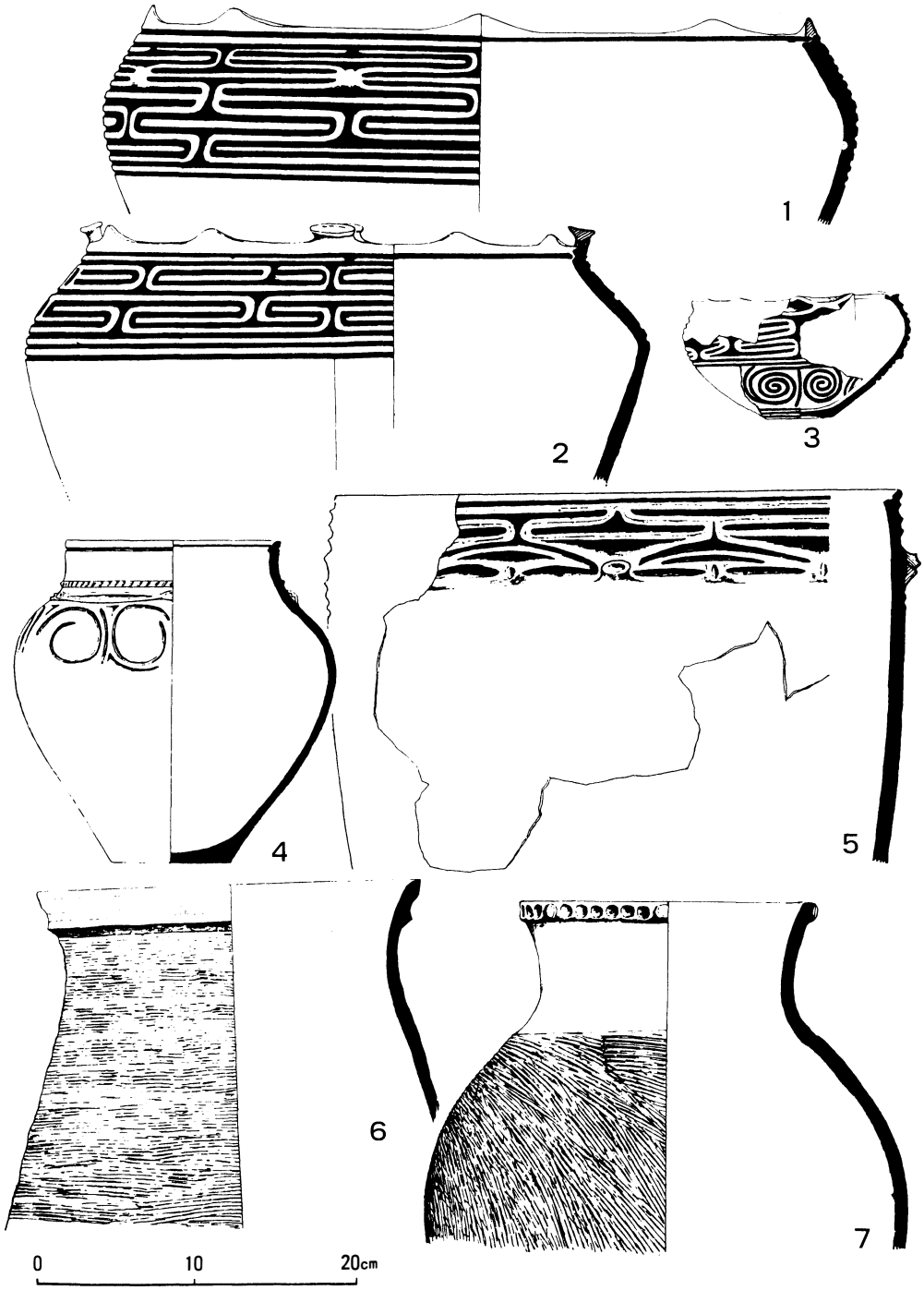
①１類として分類された精製土器が工字文的文様と茸状の突起を特徴とし、これが大洞Ａ′式的要素をもつこと。

②２類にみられる太い短線による羽状文・吸盤状突起が在地性の高い土器として考えられること。

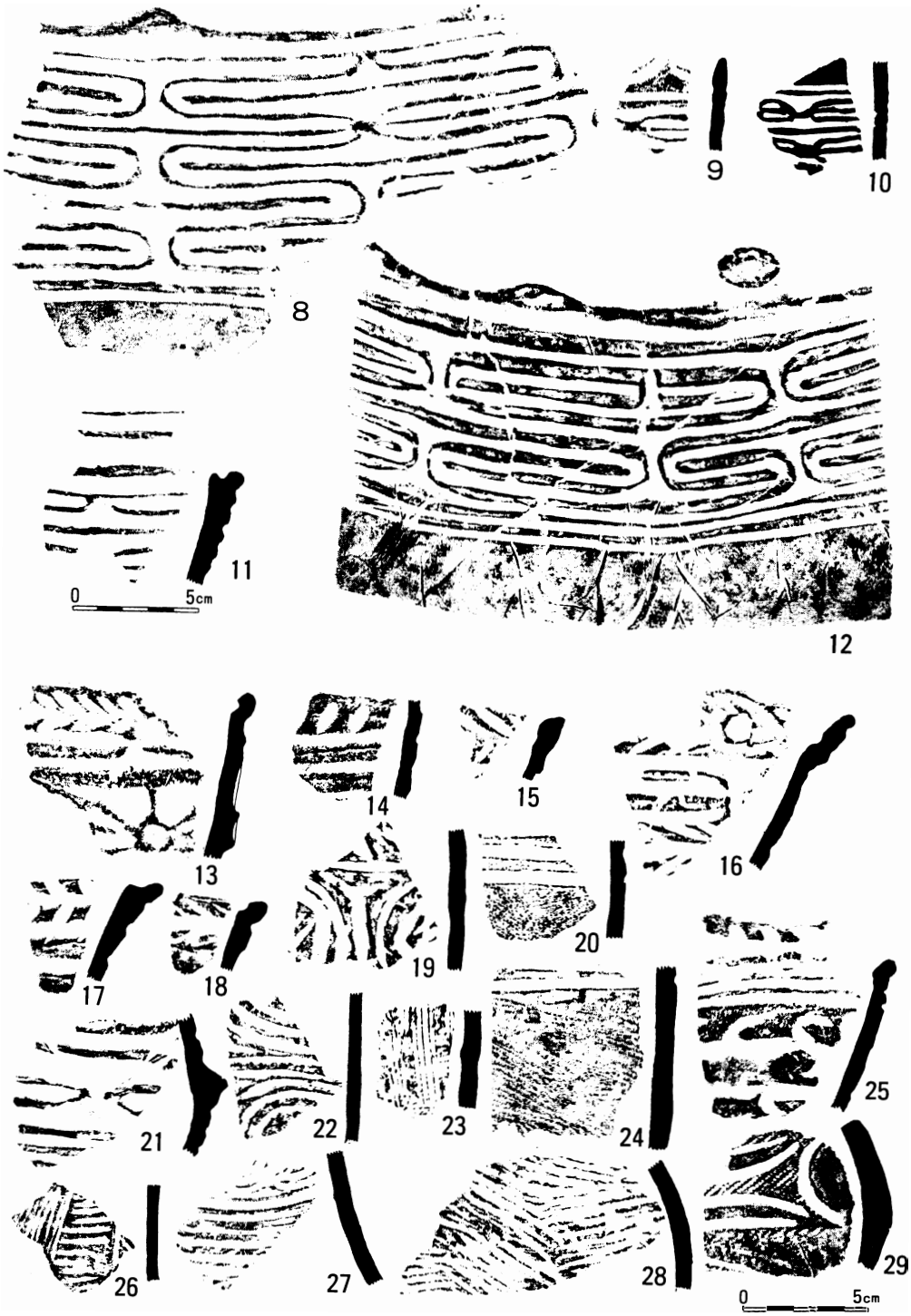
③１・２類の文様構成をもつ土器に粗製土器が加わること。

①・②は各分類の特徴、③は土器組成を意味し、さらには１類土器（精製土器）にそれほど大きな時期差が認められないために同時性は高いと予想されたことや、２類土器が強い在地性を保持していることを重視して阿弥陀堂式が設定されたと思われる。

Ａ地点資料における大江分類と今回のＣ地点資料における分類の対応表は下記の第４表のとおりである。Ａ地点資料とＣ地点資料との間には、精製土器であるⅡ類の関係は全く同一というわけにはいかない。前述した各分類の特徴においては両地点資料で共通するものが多く認められることから、時期的にも近似する資料であると考えられる。しかし、Ｃ地点資料では、Ａ地点資料では明らかにされている粗製の壺形土器が存在しない。同様にして、精製土器の文様構成も細部で異なる部分も認められる。この点も含めて互いの資料を比較検討する。



第23図　参考土器 (1)


8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5cm
0
5cm

第24図　参考土器　(2)

Ⅰ類土器

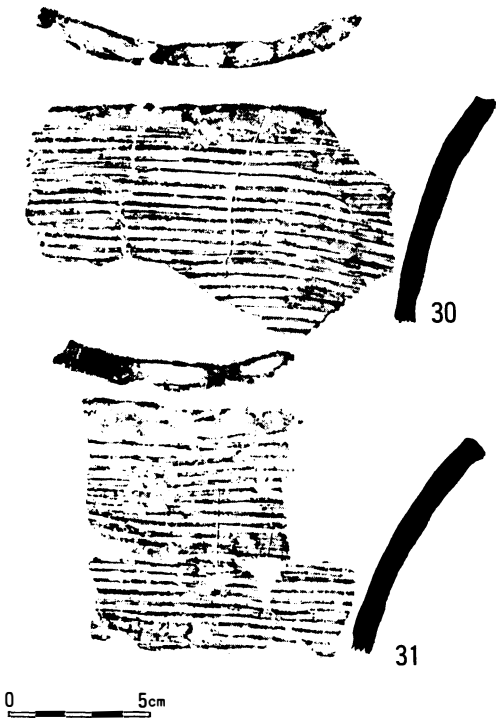
Ａ地点資料における大江分類の３類土器に相当する。Ｃ地点では破片資料が大半を占め、器形が明らかとなる資料が少ない。Ａ地点では点数が少ないものの、器形が判明する６・７のような資料があり、ある程度、本類土器の内容の類推が可能である。これによれば、下記にあげる点が注意される。

ａ壺形土器の存在

ｂ突帯文の使用

ｃ条痕調整の使用

いずれも東海系の該期の土器群と比較する上で留意すべき点であり、ａについては樫王式期、ｂ・ｃについては五貫森～樫王式期に共通する要素ともいえ、本類土器がこれら東海系の該期の土器群と近接した時期にあることを示している。Ｃ地点資料ではｂ・ｃについては確認できたが、ａについては確認できなかった。ｂにおける突帯文についてはその形態が異なり、同一視できない。Ａ地点資料では、口縁直下に押圧突帯がめぐる第23図７と口縁よりやや下がった位置に断面三角形の素文突帯がめぐる第23図６の２種類が存在する。Ｃ地点資料のなかで突帯文を有する44は口縁よりやや下がった位置にＯ字状の押圧を施す突帯文をもち、Ａ地点資料にみる突帯文とは形態が異なる。これはそれぞれが時間的差異を示すとみるかあるいは同一時期におけるバリエーション



第25図　参考土器 (3)

第４表　土器分類の比較

分　　類（1994）	Ⅰ類	Ⅱ類								Ⅲ類
		Aa	Ab	Ac	Ad	Ae	Af	Ag	B	
大江分類（1965）	３類	１類							２類	×
		×	○	?	○	?	○	×		
大参分類（1972）	１・２・３類	4A類							4B類	×
		×	○	?	○	?	○	×		

とみるかといった問題につながるが、現段階では突帯文を確認できる資料はほんのわずかで断定するには危険が多い。しかし、突帯文をもつ土器は東海系の土器との併行関係を探る上で重要な位置を占めており、その形態的バリエーションの把握及び時期の同定を進める必要がある。

また、24～26・36にみる条痕は独特の手法で、本類土器の大きな特徴となる可能性があることは先に述べたとおりで、Ａ地点資料にもこれにちかい資料（第24図26）が認められることをつけ加えておく[1)]。

Ⅱ類土器

ⅡＡ類とⅡＢ類に大別でき、ⅡＡ類はＡａ～Ａｇ類に細別した。ⅡＡ類は大江分類の１類土器、ⅡＢ類は大江分類の２類土器に相当する。阿弥陀堂遺跡出土土器を特徴づける土器群であり、時期比定の際最も参考となる資料と言えよう。Ⅰ類土器と対比することによって精製土器として位置づけられるが、Ⅰ類土器と量的には差はあまり認められない。煮沸痕も観察できることから、一般的に使用している精製土器の名称が当てはまるのか疑問があり、量あるいは使用方法について粗製土器と差異が存在しないことが本遺跡の特徴とも言えるかもしれない。

ⅡＡ類

工字文・浮線文的要素をもつ土器。Ａａ～Ａｇに分類した。Ａ地点資料とでは各分類が全て対応するわけではないが、Ａｇ類を除く各分類の構成要素には共通要素が多い。資料数が少ないために制約が大きい現状では、大枠では共通するものとして理解したい。Ａｇ類は細片のため文様構成・器形ともに不明な部分も多く、該期において安定的位置を占めるのか検討を要する[2)]。Ａｄ・Ａｅ類も文様の一部しか判明せず、不安定な分類となっている。しかし、その要素はＡ地点資料の１～３・５に共通する。

本類のうちで量的にも多く、重要な位置を占めるのがＡ地点資料の第23図１・２、Ａａ・Ａ

第５表　ⅡＡ類の分類

分　類	文 様 構 成	文様の連結部	口縁部	端部内面の凹線
Ａ地点 １・２	区画された内側を流水文で飾る。 文様帯の分離はない。	吸盤状突起	山形の突起	有り
Ａａ類	Ⅰ・Ⅱ文様帯で構成 Ⅰ文様帯は眼鏡状 Ⅱ文様帯は三叉状	吸盤突起 抉り	平口縁	有り
Ａｃ類	Ⅰ・Ⅱ文様帯で構成 Ⅰ文様帯は横走 Ⅱ文様帯は眼鏡状 （第９図55は逆）	山形の突起の上を刺突 刺突	平口縁	無し

ｃ類であろう。これらは器形の点で共通し、文様構成の点では相違する部分が認められる。各要素の変遷を探るには好都合な資料と想定される。器形以外の要素をそれぞれ列挙してまとめたのが第5表である。

これら3者の相違のなかで文様構成はもちろんのこと、とくに注目されるのは阿弥陀堂遺跡出土土器の特徴というべき茸状突起・吸盤状突起がＡｃ類では全く認められないことである。

Ａ地点資料１・２の流水文は石川分類のａ１・ｂ１類などにちかく（石川1985)、３者のうちで最も古相を呈するものと把握できる。これに対してＡａ・Ａｃ類は１・２で一体となっていた文様構成が分離し、さらに簡略化する傾向にある。このような文様帯の分離は中部高地における浮線文系土器のなかにも同様の変化が認められる。１・２で認められる他の要素も文様構成と同様、次第に消失化する傾向にあることが観察できる。３者に対応して各要素が移行するわけではないが、１・２とＡｃ類を比較すればＡｃ類が後出的と考えられ、そこにはある一定の時間差と変遷過程が存在することが予想できる。この立場に立てば１・２とＡｃ類の２段階の変遷が考えられ、この２者のヒアタスが大きいことからその中間的な様相をもつ土器を介在させることで３段階程度の変遷過程を予想することは可能であろう。Ａａ類がこれに相当するのではないだろうか。また、Ａｂ類に認められる端部内面の凹線の形骸化、文様構成の簡略化傾向はＡａ類～Ａｃ類の過渡的様相を示しているのかもしれない。以上本類が１・２から段階的に移行し、ある一定の時間的幅をもつことを述べたが、資料が非常に少ないなかで比較したため、危険性も大きい。現段階では仮説にすぎず、資料の増加によってさらに検討する余地がまだまだ残されている。時間的な幅については１・２が石川分類のａ１・ｂ１類にちかいとするなら、１・２が大洞Ａ式、Ａｃ類が大洞Ａ′式に併行するものと考えられるであろう。

ⅡＢ類

沈線によって主たる文様構成をなす土器。大江分類の２類土器にあたる。Ａ・Ｃ地点資料の両資料を合わせてもなお断片的資料しか認められない。とくに器形・胴部文様については不明である。両資料の共通要素をあげると下記のようになる。

ａ口縁端部から一条ないし数条に及ぶ太い短線による斜位または羽状の文様が施される。

ｂ口縁端部の内面に凹線をもつ。

ｃａで示した沈線の文様帯の下位には別の要素をもつ文様帯が認められる。

文様構成は明らかにできる部分が少なく、現段階ではａの要素が本類の重要な指標であると同時に最も安定した要素である。ｃにおける文様構成が明らかになればさらに分類を進めることは可能であり、この点が将来的な課題である。これらの下位に位置する文様帯のなかには工字文・浮線文的文様をもつものが認められ（第24図13、第10図85)、第24図13は文様構成・吸盤状突起などにⅡＡａ類と共通する要素を認めることができる。吸盤状突起については本類のな

かに他にも多く認められる（第10図85・87・88、第24図16）。87は茸状突起をもち、ｂの要素をつけ加えるならば、本類とⅡＡ類が強い相関関係を有することが指摘できる。また、端部内面に凹線をもつ資料のなかには形骸化が認められる資料（88）まで存在し、ⅡＡ類と共通する要素についてはⅡＡ類の同様の変遷過程を示すのであろうか。本類はａにみる独自の要素とⅡＡ類と共通する要素によって構成される折衷的な性格をもつ土器群として理解できる。在地的な土器群としての色彩が濃く、まるでどこかの段階でⅡＡ類から分離したかのようにも考えられる。

Ⅱ期

Ａ地点資料で認められるのは条痕文系のＶ類のみで、Ⅳ・Ｖ類については新たに加わった資料である。若干の補足をしておきたい。

Ⅳ類

甕形土器にみる口縁端部の肥厚・半截竹管の使用あるいは沈線の多条化などの特徴から、いわゆる亜流の遠賀川系土器に比定できる。石黒編年のＩ－４期に相当する（石黒1992）。現在までに飛騨地域において遠賀川系土器の存在は知られておらず、貴重な事例といえる。県内では発掘事例としては、藤橋村はいづめ遺跡・八幡町勝更白山神社周辺遺跡[3)]で亜流の遠賀川系土器が出土している。

Ｖ類

水神平式と呼ばれる条痕文系土器群。Ａ地点資料にも少量出土している。大半が断片的資料で詳細な時期比定は難しい。117・118の口縁部に近い破片から考えると、水神平式のなかでも比較的新しい段階のものと思われ、Ⅳ類と近接した時期となるかもしれない。また、Ａ地点資料の30・31は器形からは水神平式に類似するが、その条痕はむしろ前段階のものに近く、問題の残る土器である。

Ⅵ類

Ⅱ期に比定できる土器のうちⅣ類ないしＶ類に分類できない異系統の土器。従来より大地型と呼ばれている土器で、石川氏が型式的変化を追えるとした壺Ｅ類に相当する（石川1981）。器形が壺形を呈すること、口縁部と胴部に文様の発達が著しいことが大きな特徴である。Ａ地点資料では確認できない。飛騨地域では高山市ひじ山遺跡・同市糠塚遺跡・丹生川村細越長森遺跡に続いて４例目となる。県内ではこれらの例に加えて八幡町穀見遺跡・関市山王遺跡・同市大杉遺跡・可児市山岸遺跡・美濃加茂市二ツ塚遺跡でも例が知られ、計８ケ所の遺跡から出

土している。本遺跡の本類の土器は出土量も多く好資料となろう。

文様構成は豊富だが、対峙する連弧状の文様とこの文様の内側に生じた菱形の空間に短線などの文様を充填する手法が口縁部・胴部ともに多用される傾向がある。県内では山岸遺跡・穀見遺跡例に類似し、尾張の大地遺跡（大参1955）の例とも類似する要素が認められる。このような連弧状の文様をもつ土器は北陸地方にも散見し[4)]、従来から指摘されているように大地型が北陸との関連を有していることを示している。昭和22年に大地遺跡から出土した大地型には胴部に流水文的な文様が認められるが、これに類似する資料は今回は認められなかった（吉田1951）。第４次調査の山中遺跡例のなかには口縁部に山形の突起と茸状突起を使用した例が認められる（愛知埋文1992）。大地型には本遺跡のⅡＡ類と共通する要素が認められ、前段階の要素が該期にまで継続するかのようである。前項で述べたように茸状突起などの要素は消失化の傾向にあるとすれば、ⅡＡ類と本類との時間的差を考えれば矛盾することになる。特定の器種にのみこれらの要素が継続されたとも考えられるが、現段階での判断は難しい。大地型の系譜を考える上では資料の知られてきた美濃・尾張・北陸が注目されてきた。前段階の要素が濃厚に残る大地型が美濃・尾張と北陸とを繋ぐ飛騨で良好な資料を得たことは、今後の研究に大きな進展をもたらすものといえ、美濃・尾張・北陸だけはでなく、飛騨も含めて大地型のあり方を見直す必要がある。その意味では、ⅡＡ類と本類とを繋ぐ可能性が高い石川氏の壺ＥⅡ・Ⅲ類、いわゆる浮線渦巻文系土器が認められなかったのは残念である。

また、本類の土器が今回の資料中でかなり量的に多いことにも大きな特徴としてあげられる。これが本遺跡のなかで本類の土器の普遍的なあり方を示すのか疑問も残るが、本類の土器が単体出土することが多いことと比べれば、やや異なるあり方を示しているものと考えられる。

まとめ

阿弥陀堂遺跡出土の土器群について、従来、知られてきたＡ地点資料にＣ地点資料を加えることで若干の検討を試みた。最後にⅠ期についての問題点を述べておく。

本遺跡出土の土器群は縄文時代晩期終末期に位置づけられ、その細かな時期比定についてはⅡＡ類が重要な鍵を握っている。Ａ地点資料では粗製土器と精製土器が同一時期か否かという点に見解が異なる。それは粗製の壺形土器第23図７を樫王式期におくことによって、精製土器の時期が大洞Ａ・Ａ′式期のどちらかにするべきかでずれが生じるためである。今回のＣ地点資料により重視しなければならないのは、ⅡＡｃ類の存在である。前述したようにＡ地点資料の精製土器と比べて後出的なものとするなら、本遺跡の精製土器が単一時期で構成されるものではなく、大洞Ａ～Ａ′式期程度の幅をもつものとして再構築して理解する必要がある。また、精製土器に限れば、Ａ地点資料には古相を呈する流水文をもつ精製土器が存在するのに、新相に属するⅡＡｃ類に認められない。逆にＣ地点資料には古相の流水文をもつ資料が存在せず、

新相のⅡＡｃ類があり、両資料にはある程度、新古の関係が認められるかのようである。これには同様にして粗製土器の位置づけも行わなければならないが、比較できる資料もなく、その判断は難しい。しかし、Ａ地点資料の壺形土器にも肩部に段が存在することや全面条痕ではない点など樫王式期の典型例にするには疑問な点も存在する。現在までの研究の進展により、粗製土器の壺形土器の初源は馬見塚式期まで繰り上げて考える見解もあり、これらの点をふまえて本遺跡出土の土器を再検討する必要がある。それにはまだ該期の資料が少なく、資料的制約が大きい。

現在、本遺跡出土土器に類似する資料は白川村木谷遺跡・八幡町勝更白山神社周辺遺跡・美濃加茂市狭間遺跡でも出土しており、大まかな分布圏は予想できるようになった。しかし、木谷遺跡から出土した肩部に眼鏡状の文様をもつ浅鉢は新知見の資料で、その内容はまだまだ貧弱な段階にあるといわざるをえない。阿弥陀堂式という名称を使用しなかったのは、前述したように資料的に不安定な段階にあるからで、阿弥陀堂式の土器組成のあり方・分布・変遷過程など解明すべき課題は多い[5)]。それらが明らかにされるなかで在地性が高いとして理解される阿弥陀堂式の具体的な展開が明らかにされるのであろう。その際、Ａ地点資料のなかには下野式と類似する資料が認められ（増子1981)、東海・中部高地だけでなく、北陸地方も含めた広い範囲のなかで阿弥陀堂式を理解する姿勢も必要になろう。今後の資料の増加によって多くの課題が明らかになることを期待したい。

〔注〕

１）類似する手法が認められる資料が、断片的資料だが石川県柴山出村遺跡にも存在する。該期に伴うものとすればⅥ類、すなわち大地型に近接した時期まで下がる可能性も残されている。

２）美濃加茂市狭間遺跡の資料中にＡｇ類に類似する資料が認められる（伊藤・増子1972)。

３）当センターで平成４・５年度に発掘調査を実施した。平成６年度に報告書刊行予定。

４）柴山出村・柴山潟底貝塚・新堀川遺跡で認められる。

５）阿弥陀堂式の存在を否定するわけではない。阿弥陀堂式は飛騨地域における縄文時代終末期を示す土器型式であることは確実である。しかし、資料が少なく、本遺跡出土土器と対比できる良好な資料が現在のところ見あたらないため、慎重を期して、阿弥陀堂式の名称を用いなかった。

第2節　発掘調査のまとめ

今回の発掘調査の概要は、前章および前節までで述べた通りである。ここでは、最後に今回の発掘調査の成果と反省を簡単にまとめたい。

阿弥陀堂遺跡および深作裏垣内遺跡は、小坂川の右岸の段丘に位置する。このあたりは、小坂町内では最も日当たりのよい場所といわれている地域であるが、西寄りの地点は、洪水時に冠水する地域でもあった。

今回の調査地点は、川に近い方を通っている県道の拡幅部のみの調査であり、両遺跡の中心部からはやや離れた地点の調査であった。

深作裏垣内遺跡に関しては、過去に縄文中期初頭の土器が復元されており、同時期の遺物の出土が期待された。しかし、今回の調査では、縄文中期から後期にかけての土器片を中心に少量の遺物が出土したのみで、まとまった資料は得られなかった。

阿弥陀堂遺跡に関しては、調査区の一部において、土器を中心にある程度まとまった資料が出土した。縄文晩期から弥生にかけての土器については、前述したように、従来から知られていた浮線文系の土器に加えて、遠賀川系の土器や、大地型の土器の資料が確認された点などが注目される。過去の調査地点とやや地点が異なるが、この時期の土器編年を中心とした研究に新たな資料を加えることができた。

しかし、今回は短期間の発掘で、反省点も多い調査であった。まず、発掘調査の精度の問題である。遺構検出作業は慎重に進めたが、結局遺構は検出されなかった。従って遺跡の性格が十分には解明できなかった。また、縄文晩期末と弥生前期をつなぐ非常に微妙な時期の遺物が出土したが、より厳密な調査の方法があったのではないかと思われる。

次に、調査成果の公開が不十分であったことがあげられる。貴重な埋蔵文化財を記録保存するための緊急発掘調査であったが、調査の経過および成果を、地域の人々を中心により多くの人に伝える努力が足りなかったことが悔やまれる。

以上、まとめとしてはやや不適切な内容であるが、自戒の念を込めて、ここに筆を置く。

引用・参考文献

愛知県埋蔵文化財センター　1992『山中遺跡』
愛知考古学談話会　1988 『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』研究編
石川日出志　1981「三河・尾張における弥生文化の成立－水神平式土器の成立過程について」『駿台史学』52
1985「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』42-4
伊藤克司・増子康真　1972「美濃の縄文晩期後半土器について」『岐阜史学』60
大江錦舟　1965「先史時代」『小坂町誌』
大江上　1964「先史集落立地の諸問題－小坂川流域深作ムラを中心として－」『飛騨春秋』9－9
大江命　1962「岐阜県小坂町上垣内遺跡」『日本考古学年報』11
1965『飛騨の考古学Ⅰ－益田川流域の縄文文化』
大江命ほか　1973『北裏遺跡　国道41号線名濃バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
大参義一　1955「愛知県大地遺跡」『古代学研究』11
1972a 「縄文式土器から弥生式土器へ」『名古屋大学文学部研究論集』56
1972b「第三章　縄文時代」「第四章　弥生時代」『岐阜県史』通史編原始
大参義一ほか　1970『新編　一宮市史』資料編一
小坂町教育委員会　1978『水口遺跡　ソラ遺跡』
1984『南垣内遺跡Ⅰ』
岐阜県教育委員会　1962『岐阜県遺跡目録』
1989『徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書　はいづめ遺跡』
1990『岐阜県遺跡地図』
1991『徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書　第2集　小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』
紅村弘ほか　1979『東海先史文化の諸段階（資料編Ⅱ）』
小村茂・上野与一　1975「石川県加賀市柴山潟底貝塚出土の弥生式土器」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌18
設楽博己　1982「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34－4
関市教育委員会　1985『山王遺跡』
突帯文土器研究会　1993『突帯文土器から条痕文土器へ－伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まり－』
永峯光一　1969「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9
成瀬満　1965「長瀬石器時代遺跡発掘記録」『飛騨春秋』10－5
増子康真　1965「尾張平野における縄文晩期後半期の編年的研究」『古代学研究』40
1981「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階　本文編・補足改定版』
湯尻修平　1983「柴山出村式土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌26
吉田富夫　1951「接触土器の一新例」『考古学雑誌』37-4

第6表　阿弥陀堂遺跡出土石器一覧表（単位はcmおよびg）

石鏃

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C35	V	03	3.3	(1.6)	0.4	(1.8)	下呂石	14－1	欠損
2	C37	Ⅳ	02	(1.4)	1.3	0.3	(0.7)	下呂石		欠損
3	C37	V	27	2.1	1.5	0.2	0.6	下呂石	14－5	
4	C37	V	28	(1.9)	1.0	0.3	(0.6)	下呂石	14－6	欠損
5	C40	V	12	3.0	2.1	0.5	4.0	下呂石	14－4	
6	C43	Ⅱ	11	2.5	1.3	0.3	1.0	下呂石	14－2	
7	表採		09	(1.9)	1.0	0.3	(0.6)	下呂石	14－3	欠損

石錐

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C35	V	06	(3.2)	1.9	0.9	(5.2)	下呂石	14－12	欠損
2	C39	Ⅲ	01	(3.3)	2.3	0.7	(4.5)	下呂石	14－10	欠損
3	C41	Ⅲ	01	4.2	1.0	0.4	1.8	下呂石	14－8	
4	C43	Ⅱ	01	(3.2)	2.4	0.6	(2.8)	下呂石	14－7	欠損
5	C43	Ⅱ	12	2.1	1.4	0.5	2.1	下呂石	14－9	
6	C43	Ⅱ	13	2.8	1.6	0.7	3.2	下呂石	14－11	

ピエス・エスキーユ

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C34	Ⅲ	01	3.0	2.6	1.5	8.3	下呂石	14－15	
2	C35	V	18	2.1	1.8	0.9	3.6	下呂石	14－13	
3	C40	Ⅱ	07	3.4	2.1	1.3	7.8	下呂石	14－16	
4	C41	Ⅰ	07	1.6	1.2	0.5	1.0	下呂石		
5	C42	Ⅱ	04	2.7	1.7	0.4	2.3	下呂石	14－14	
6	C42	Ⅱ	10	3.5	2.2	1.7	13.7	下呂石	14－17	

ヘラ形石器

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C37	V	07	3.9	2.6	1.1	11.6	下呂石	14－18	
2	C37	V	19	2.8	1.3	0.6	2.0	下呂石		
3	C44	Ⅲ	01	3.3	2.6	1.3	12.0	下呂石	14－19	

削器

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C39	Ⅱ	06	3.9	2.0	0.9	6.9	下呂石		
2	C39	Ⅱ	12	4.1	2.9	1.4	15.3	下呂石	14－20	

掻器

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C41	Ⅱ	01	3.9	2.8	0.9	7.5	下呂石	15－21	

打製石斧

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	石　材	挿図番号	備　考
1	C34	Ⅱ	01	(11.2)	(6.6)	(2.0)	(130.7)	?	凝灰石	16－31	
2	C37	Ⅴ	05	(8.2)	(5.4)	(1.0)	(56.7)	短冊形	凝灰石	16－27	
3	C38	Ⅱ	01	(9.0)	(4.4)	(1.9)	(81.5)	短冊形	凝灰石	16－30	
4	C38	Ⅳ	01	(10.3)	(7.4)	(2.1)	(192.5)	短冊形	安山岩		
5	C42	Ⅱ	01	(9.8)	(6.8)	(2.0)	(128.6)	短冊形	凝灰石	16－28	
6	C42	Ⅱ	02	(9.2)	(4.8)	(1.4)	(58.0)	短冊形	凝灰石	16－29	
7	C42	Ⅱ	09	(11.2)	(8.4)	(2.8)	(248.6)	?	凝灰石		

横刃形石器

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C43	Ⅱ	10	(8.4)	(6.4)	(1.7)	(99.4)	凝灰石	16－32	

磨石

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C35	Ⅱ	01	12.0	9.0	6.1	952.5	凝灰石	16－33	

第7表　深作裏垣内遺跡出土石器一覧表（単位はcmおよびg）

石鏃

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	B 3	Ⅰ	01	2.5	(1.5)	0.3	(0.9)	下呂石	20－1	欠損

石錐

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	C31	Ⅱ	01	3.9	2.8	0.9	7.5	下呂石	20－2	

ピエス・エスキーユ

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	表採		07	1.7	2.0	0.4	1.1	下呂石	20－3	

削器

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	B 3	Ⅰ	02	5.6	3.2	0.9	14.8	下呂石	20－4	

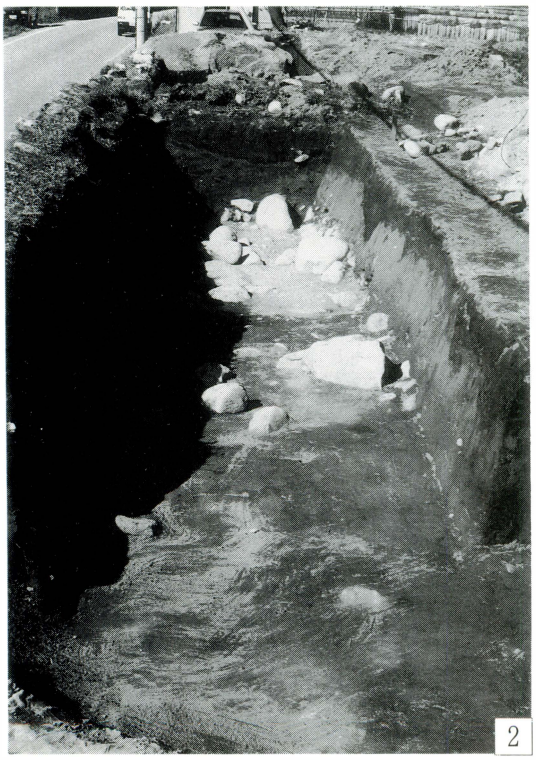
打製石斧

	出土区	層位	番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	石　材	挿図番号	備　考
1	C15	Ⅲ	01	(10.5)	(7.3)	(3.5)	(362.0)	撥　形	凝灰石	21－11	
2	C16	Ⅲ	02	(11.7)	(6.4)	(2.4)	(233.7)	短冊形	凝灰石		
3	C18	Ⅲ	01	(8.2)	(5.6)	(2.1)	(120.4)	短冊形	凝灰石	21－6	
4	C18	Ⅲ	02	(8.0)	(4.6)	(1.4)	(58.5)	撥　形	凝灰石	21－12	
5	C26	Ⅱ	01	10.6	5.8	2.0	179.2	短冊形	凝灰石	21－9	
6	C28	Ⅱ	01	(10.0)	(6.5)	(0.9)	(74.9)	短冊形	凝灰石	21－10	
7	表採		05	(11.9)	(5.6)	(2.3)	(213.1)	短冊形	凝灰石	21－8	
8	表採		06	11.2	4.3	1.6	96.2	短冊形	凝灰石	21－7	

図版1

1．阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡遠景　　2．阿弥陀堂遺跡発掘前の状況

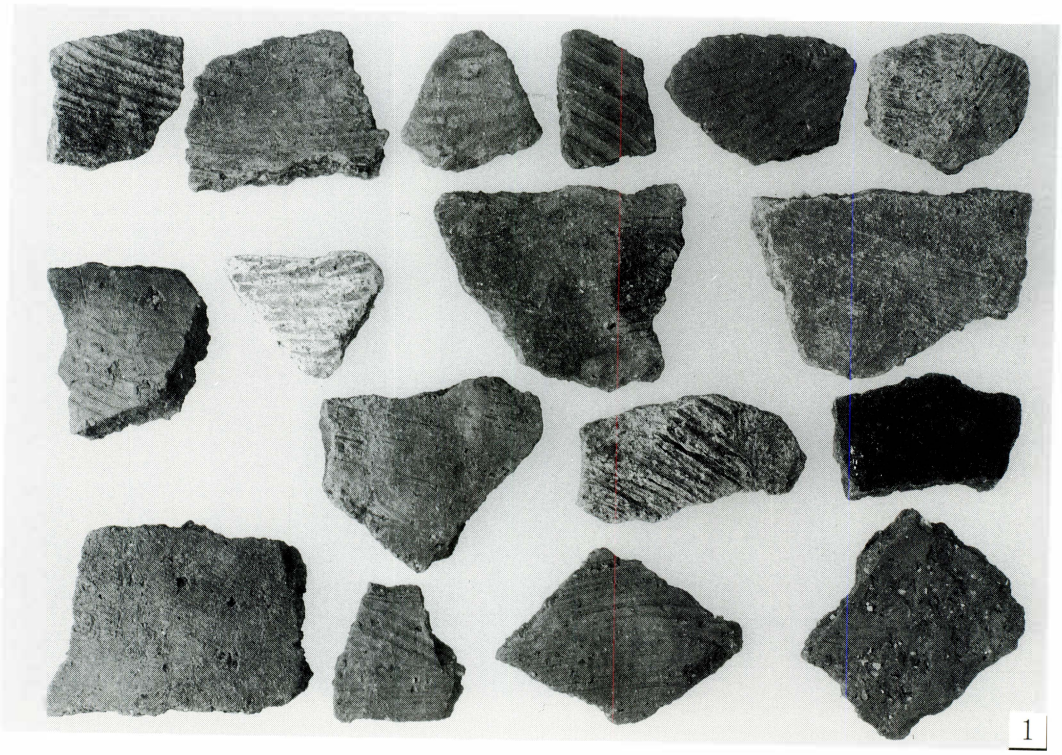
図版2

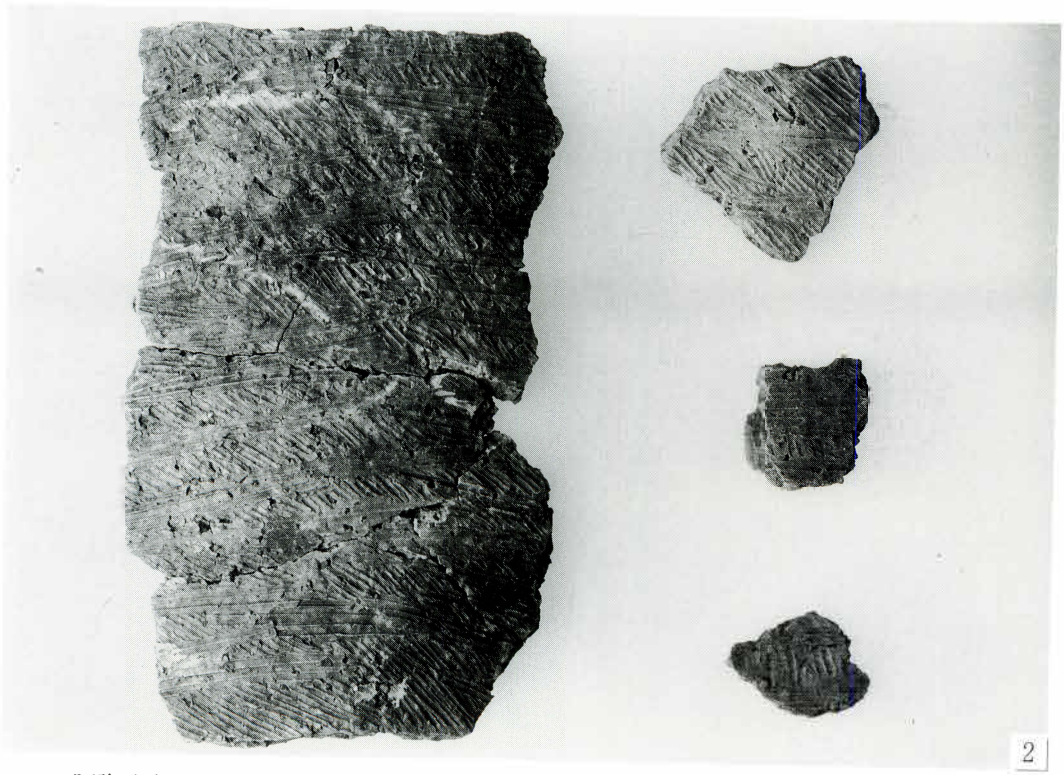


1．C42区北壁　　2．阿弥陀堂遺跡発掘後の状況　　3．作業風景

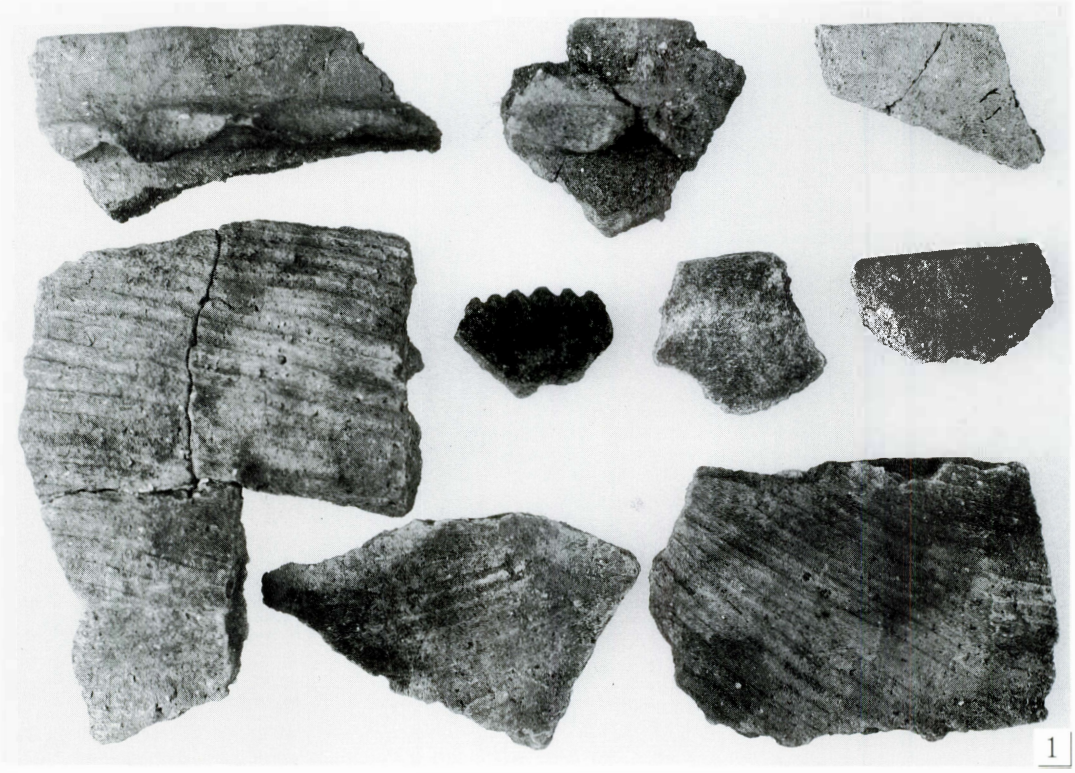
1・2．遺物出土状況　　3．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅰ類）

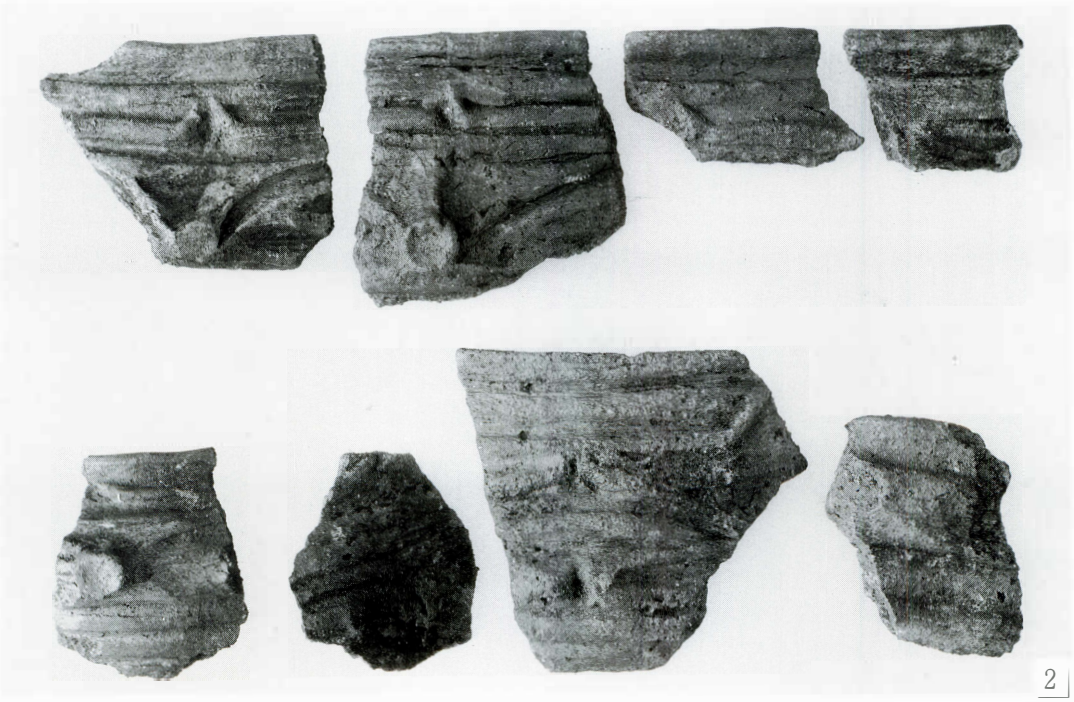
図版4





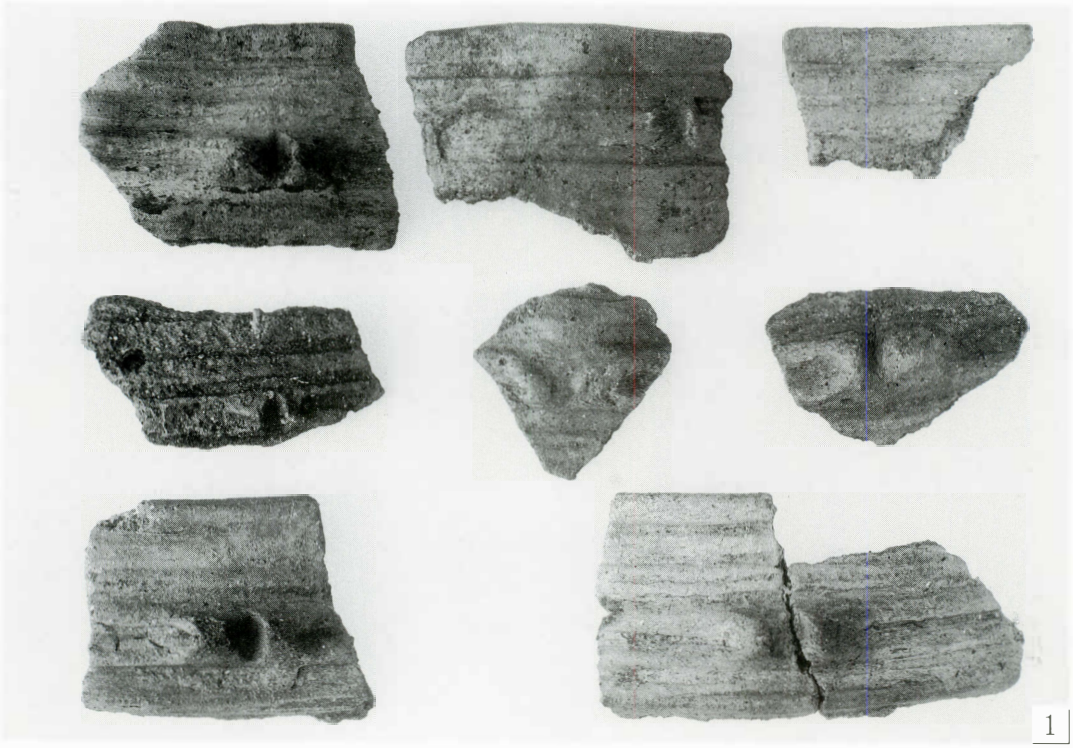
1・2．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅰ類）



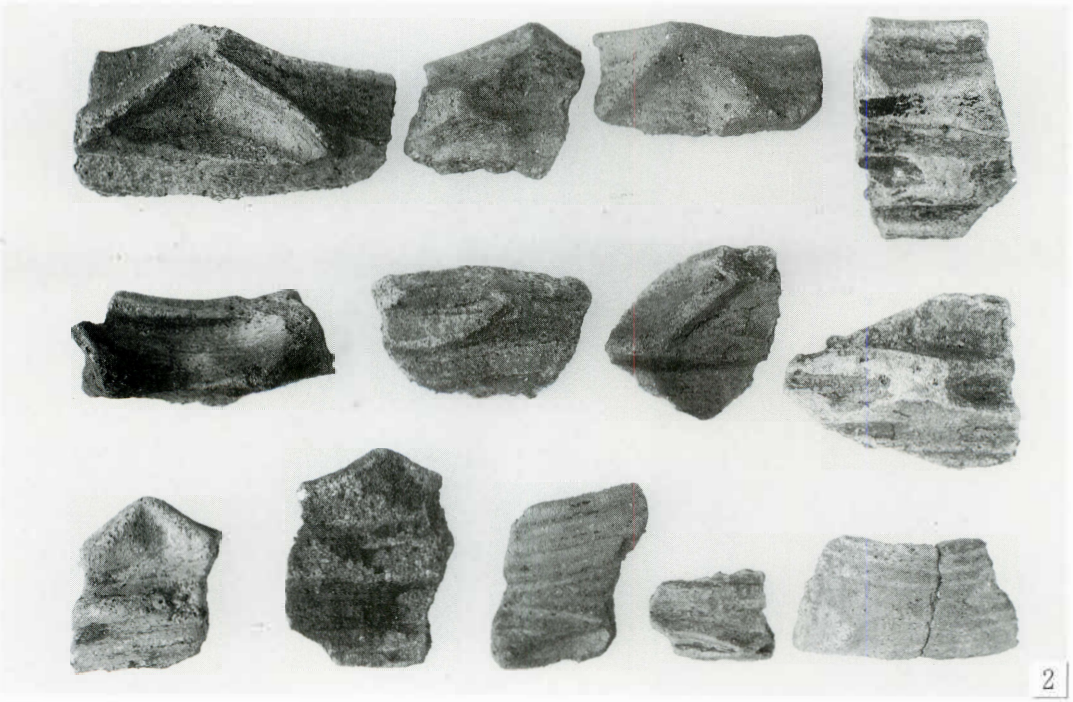


1．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅰ類）　　2．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡAa・Ab類）

図版6

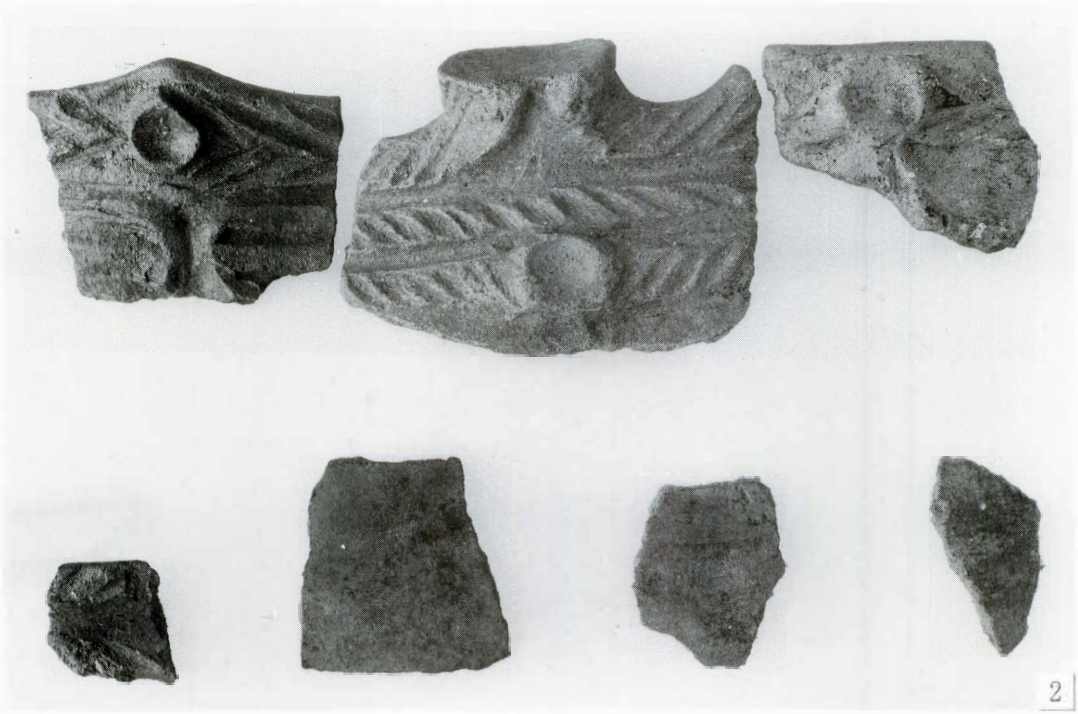


1



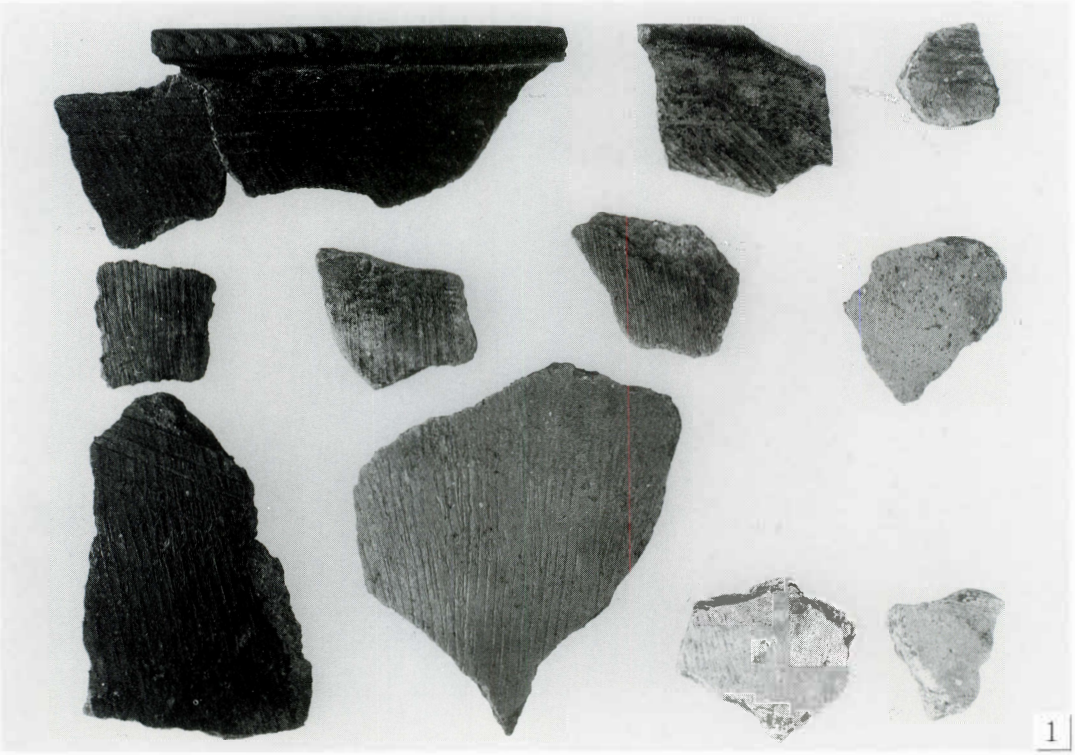
2

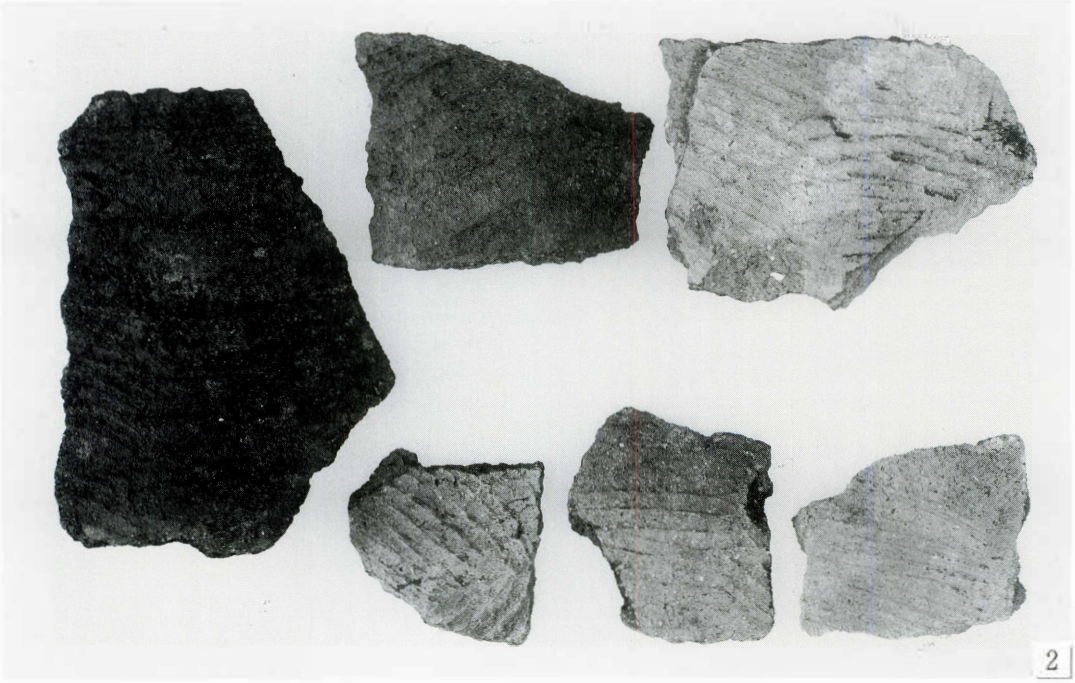
1．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡAc類）　　2．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡAd・Ae・Af類）



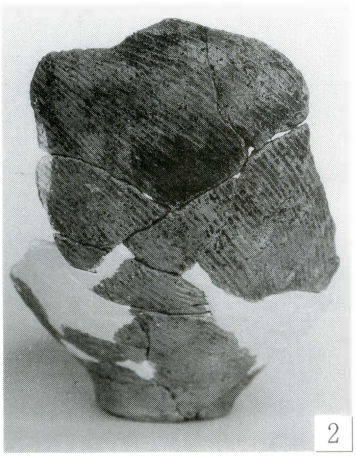
1．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡAg類）　　2．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅡB・Ⅲ類）

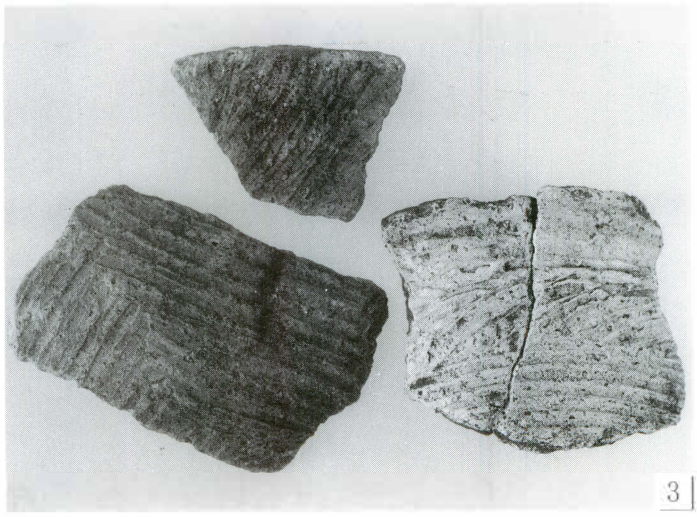
図版8





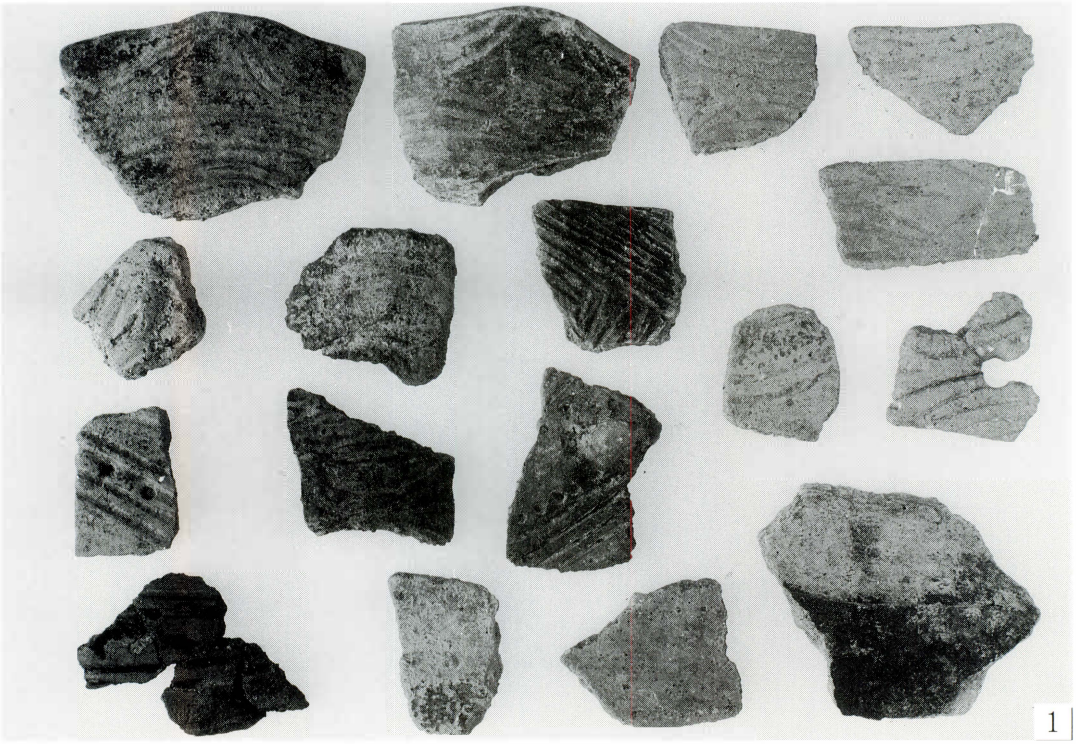
1．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅳ類）　　2．阿弥陀堂遺跡出土土器（ⅤA類）

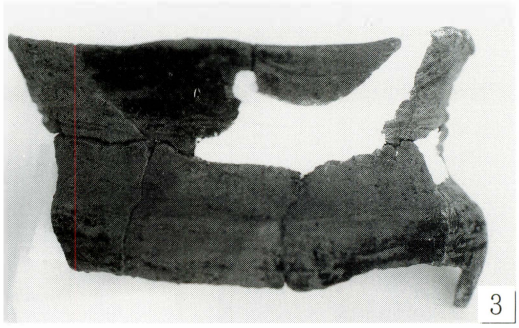


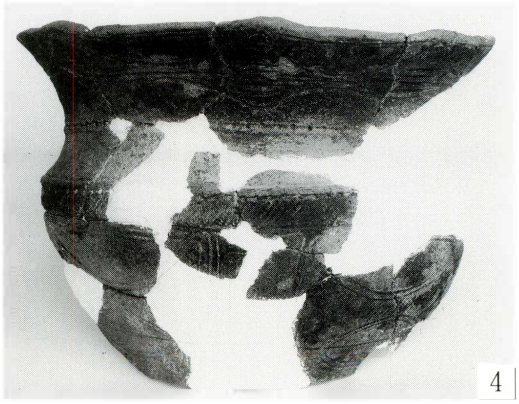


1・2．阿弥陀堂遺跡出土土器（ＶＡ類）　　3．阿弥陀堂遺跡出土土器（ＶＢ類）

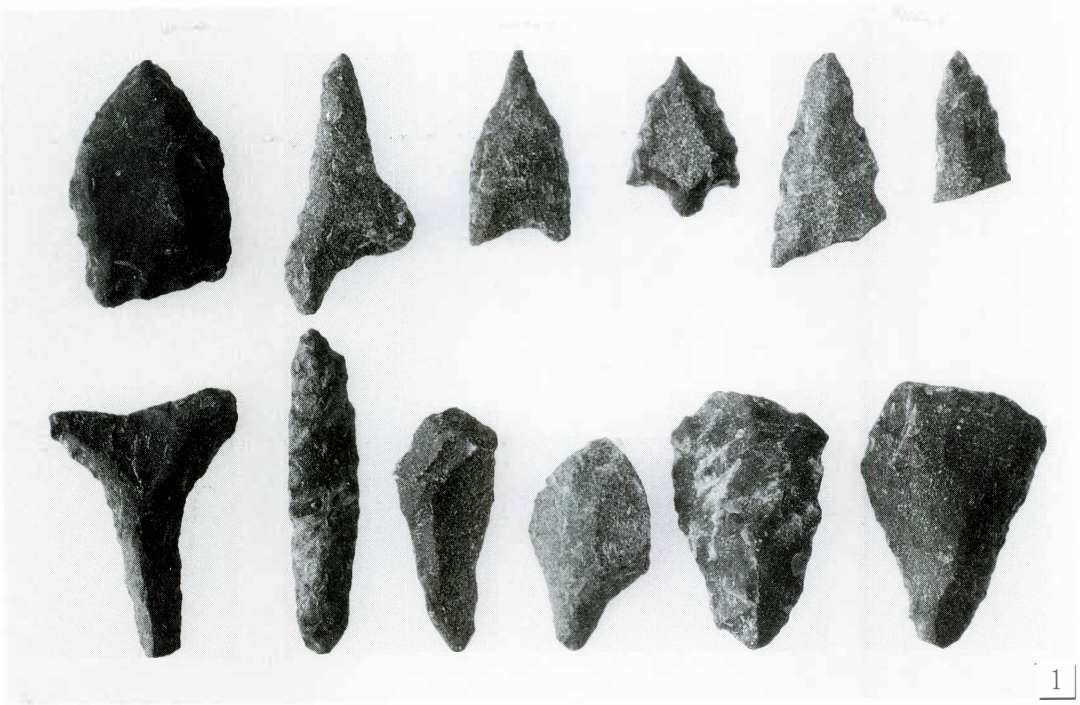
図版10

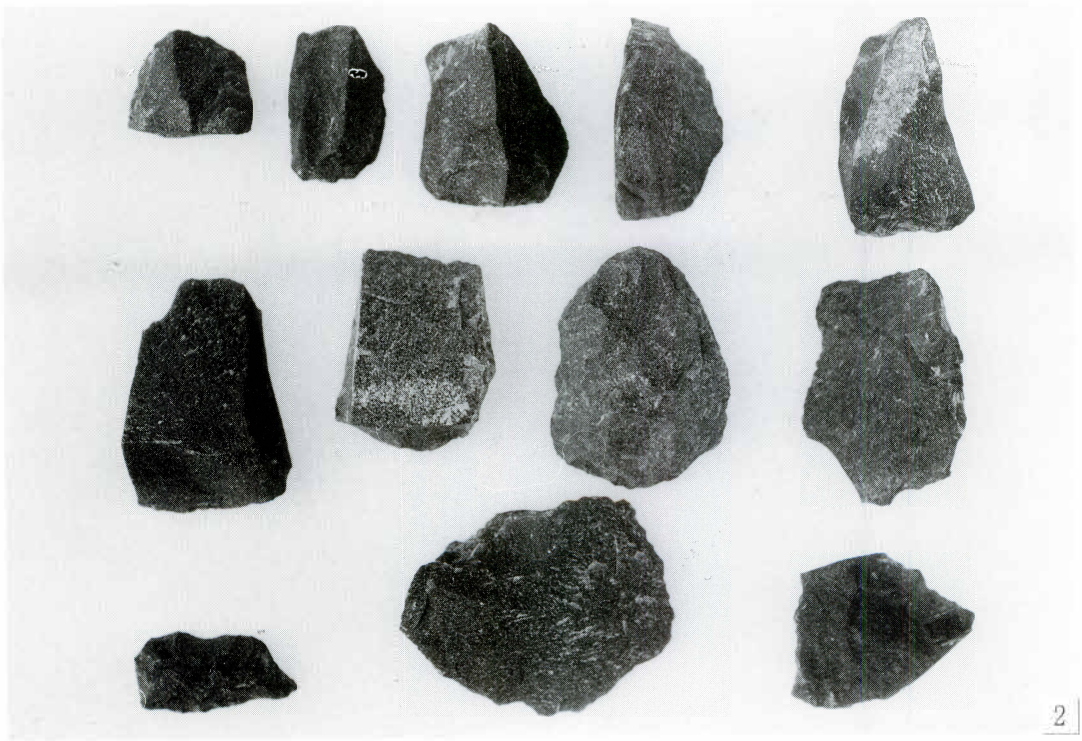






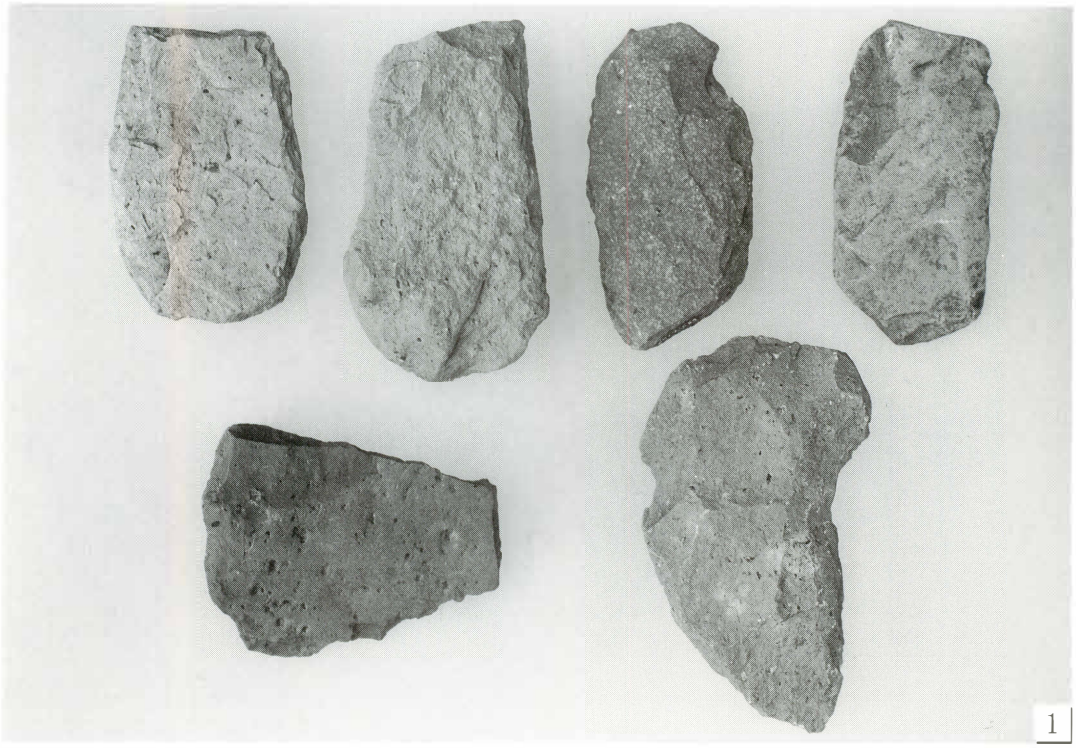
1・2・3・4．阿弥陀堂遺跡出土土器（Ⅵ類）

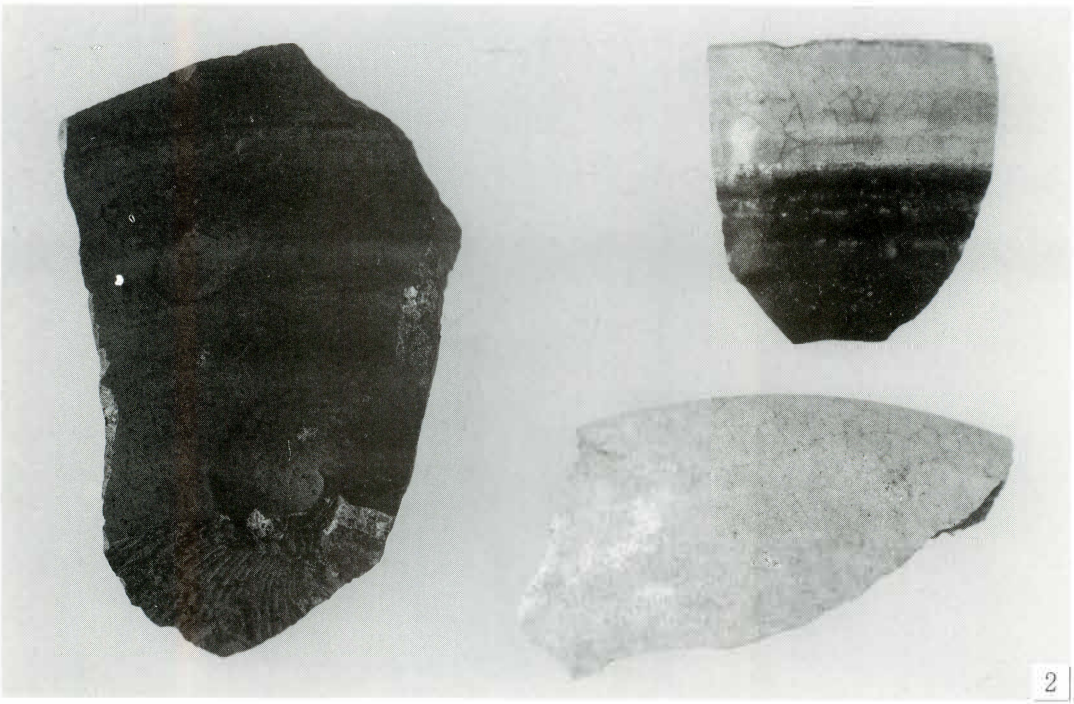




1・2．阿弥陀堂遺跡出土石器

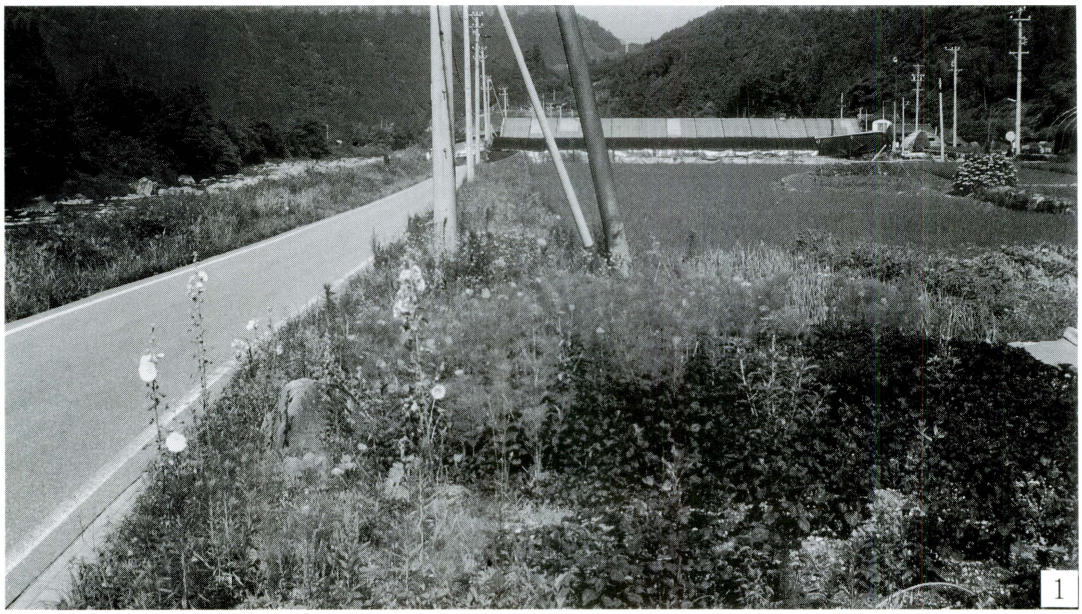
図版12





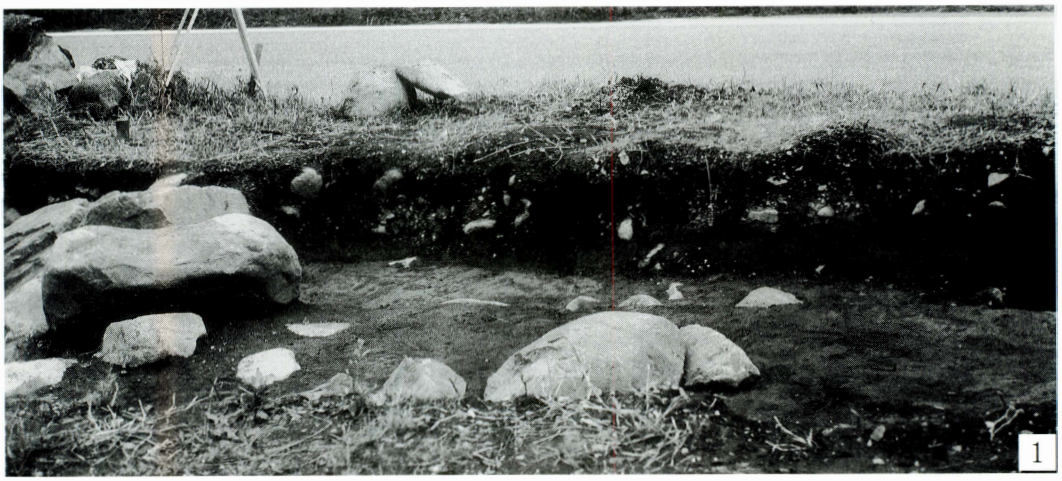
1．阿弥陀堂遺跡出土石器　　2．阿弥陀堂遺跡出土陶磁器

図版13



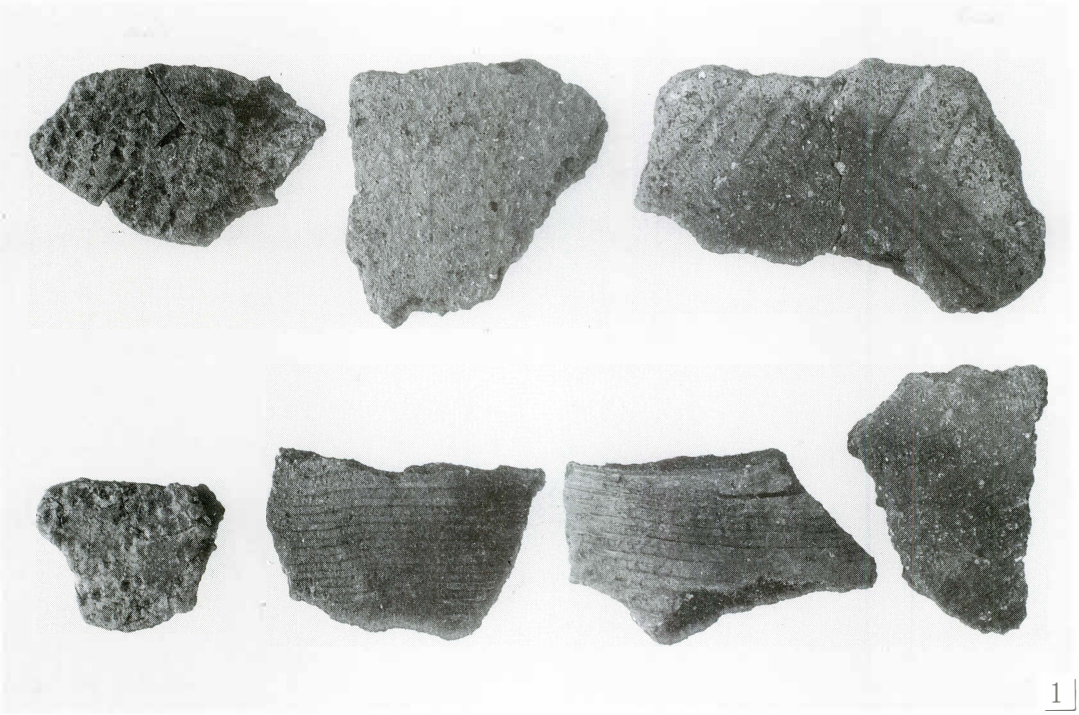
1．深作裏垣内遺跡発掘前の状況　　2．深作裏垣内遺跡発掘後の状況

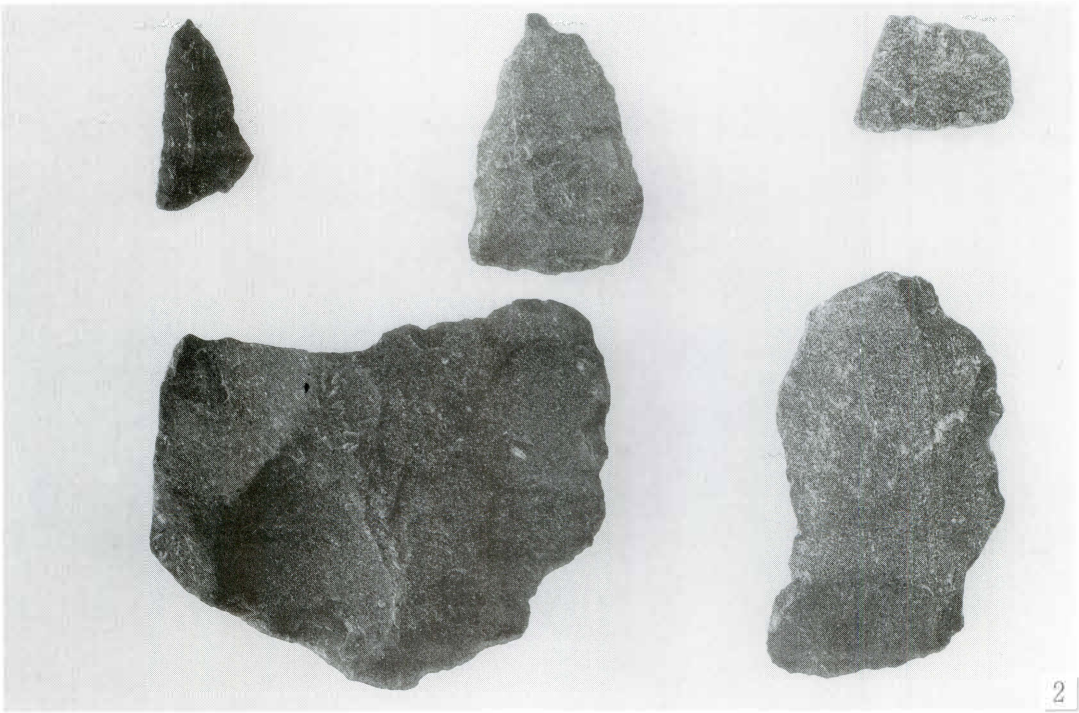
図版14



1・2．B 1～4区南壁　　3．C23・24区北壁

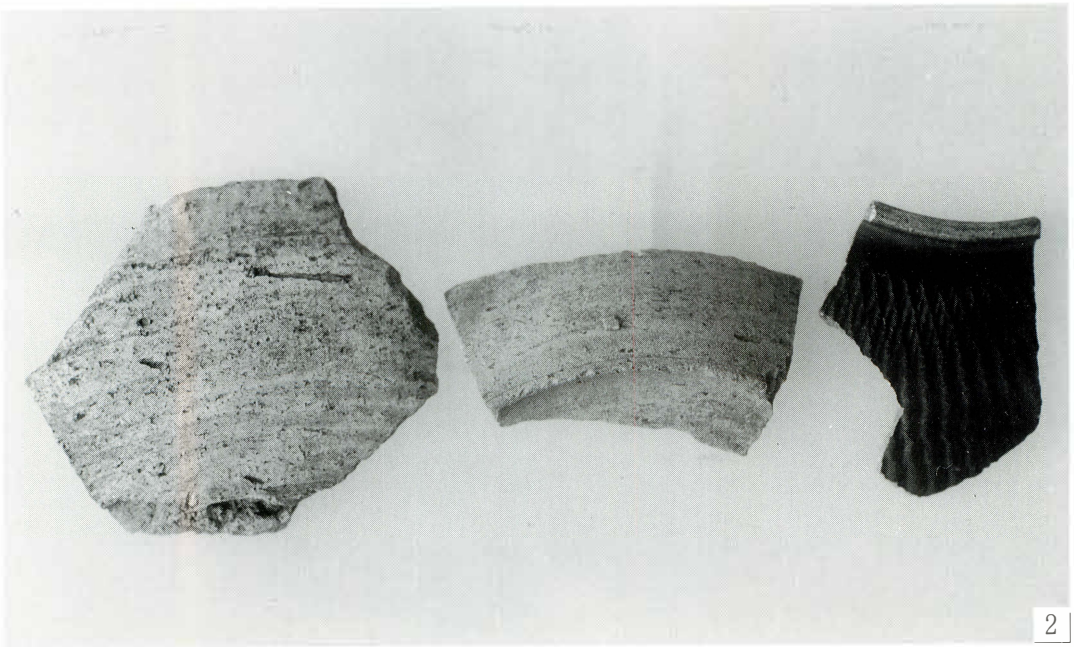
図版15





1．深作裏垣内遺跡出土土器　　2．深作裏垣内遺跡出土石器

図版16



1．深作裏垣内遺跡出土石器　　2．深作裏垣内遺跡出土陶磁器

文献データシート

書　　名	岐阜県文化財保護センター調査報告書　第18集 阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡
執 筆 者	藤田　英博　　古田　靖志　　上嶋　善治
発 行 所	財団法人 岐阜県文化財保護センター
発行年月	1994年３月
遺 跡 名	阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡
読　　み	あみだどういせき・ふかさくうらがいといせき
所 在 地	阿弥陀堂遺跡：岐阜県益田郡小坂町赤沼田深作字阿弥陀堂 深作裏垣内遺跡：岐阜県益田郡小坂町赤沼田深作字裏垣内
調査原因	県単道路改良工事（湯屋温泉線）
種　　別	阿弥陀堂遺跡：散布地 深作裏垣内遺跡：散布地
時　　代	阿弥陀堂遺跡：縄文（晩）・弥生（前） 深作裏垣内遺跡：縄文（中・後）

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第18集

阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡

1994年３月25日　印刷
1994年３月31日　刊行

編集・発行　岐阜県本巣郡穂積町牛牧宮下395
財団法人 岐阜県文化財保護センター
印　　刷　斐太中央印刷株式会社